

《翻 訳》

ゲルハルト・シュミット
「近代ザクセン国制史入門」(IX)

松 尾 展 成

目 次

訳者序言

第1章 1831年から1918年までのザクセンの中央行政

序論

第1節 1815年以後のザクセンと1830年以後の中央行政の改革(23巻1号)

第2節 1831年から1866年までの中央行政(23巻2号)

第3節 1866年から1918年までの中央行政(23巻3号)

第4節 結論と統計的概観

第1章訳注 (23巻4号)

第2章 1833年から1918年までのザクセン邦議会——その選挙権と社会的構成

第1節 序論

第2節 1831年憲法における邦議会

第3節 1833年から48年まで

第4節 1848年の革命から1850年まで

第5節 1850年から67年まで

第6節 1867年から95年まで

第7節 1895-96年から1906年まで

第8節 1906年から18年まで

第9節 総括

第2章訳注 (24巻1号)

第3章 1874年から1945年までのザクセンの郡とその前身

序論

第1節 1874年以前の下級行政官庁

- (1) 郡長
- (2) 領邦君主の管区 (A)
- (3) 1874年までのオーバーラウジッツのアムトとアムト管領 (郡長)
- (4) 家産裁判所
- (5) 管区 (GA)

第2節 1874年から1945年まで郡長が主宰した諸機関

- (1) 郡
- (2) 地区自治体連合
- (3) 地区教育監督委員会 (1874—1919年) と地区教育部 (1919—45年)
- (4) 地区教会監督委員会 (1874—1926年)
- (5) ゴルブ人に対するオーバーラウジッツ諸郡の監視——パウツェン郡ゾル
ブ人対策部

第3章訳注 (24巻2号)

追加訳注

和独索引 (24巻4号)

追加訳注(2)

独和索引 (25巻1・2号)

追加訳注(3)

ザクセン王家系図 (1806—1918年)

大臣歴任表 (1813—1918年)

人名索引 (本号)

追加訳注(3)

(第1章)

(第1節)

[1] 本訳 (I), 166ページへの追加。ただし, 1831年憲法の規定においては Stände および Ständeversammlung である。Blaschke 1958, S. 84; Blaschke 1983(a), S. 613.

[1a] 本訳 (I), 200ページ14行目「工業化」への追加訳注。ザクセンの工業化に関する近年の業績として Forberber 1982と Kiesewetter 1988がある。

- [1b] 本訳（Ⅰ），200ページ15行目「人口」への追加訳注。ザクセンの人口は1816年に119.5万人，1933年に519.7万人であり，1平方キロメートル当たりの人口密度は1816年に80人，1933年に347人であった。ドイツ全体の人口密度は1816年に47人，1933年に140人であった。Volkszählung 1934/35, S.2, 5. ザクセンの1914年の人口は498.5万人であった。Bevölkerung 1914/15, S.13. 以上の数字（1816年と1914年は公式推計値）はすべて訳者によって四捨五入値にされている。
- [1c] 本訳（Ⅰ），200ページ20行目「1861年」と21行目「1925年」への追加訳注。その典拠は Bevölkerung 1863, S.71と Berufszählung 1926/27, S.82である。
- [1d] 本訳（Ⅰ），201ページ12行目「ボルン」への追加訳注。1848年9月に労働者友愛会中央委員会がベルリーンからライプツィヒに移るとともに，その機関紙『友愛』をライプツィヒで発行していた植字工の彼は，1849年のドレーズデン「五月蜂起」に参加し，その軍事的指導者となった。蜂起鎮圧後に加わったボヘミアとバーデンの革命運動も挫折したために，彼はスイスに逃がれた。NDB, Bd.2, S.467; Kosch 1963, S.143; Kretzschmar 1956, S.437; Osterroth 1960, S.34-36; Weber 1970, S.150, 186, 346; BWDG 1973, hrsg. von K. Bosl u. a., S.330-331; Zeise 1989(a), S.364, 366.
- [1e] 本訳（Ⅰ），201ページ13-14行目「早期の発生」への追加訳注。ザクセンの初期労働者運動史については，山井 1993, 83-98, 127-129, 202-244ページを参照。
- [1f] 本訳（Ⅰ），201ページ19行目「それを上回った。」への追加訳注。工場主の営業税納入額は1855年には39,888ターラーで，商人のそれ（39,233ターラー）を上回った。Steuern 1858, S.56.
- [2a] 本訳（Ⅶ），248ページへの追加。1806年にマイセン県知事（K）（以下において，特記されない場合，ザクセンの官庁と官職である。）に，13年5月に内務部および外務部担当内局大臣になったアインジーデルについては Vgl. ADB, Bd.5, S.760-761; NDB, Bd.4, S.400-401; Kosch 1963, S.282; Klein 1982, S.105; Blaschke 1983(a), S.611; Blaschke 1991 (a), in: PdV 1991, hrsg. von Jeserich / Neuhaus, S.107-111.
- [7a] 本訳（Ⅱ），203ページ8行目「フリードリヒ・アウグスト一世」（1806年までの選帝侯としては三世）への追加訳注。彼については Vgl. ADB, Bd.7, S.786-789; NDB, Bd.5, S.575-576; Kosch 1963, S.358; BWDG 1973, S.813-815.
- [8b] 本訳（Ⅷ），250ページへの追加。各省は『国政便覧』において1907年までは Departement (der Justiz など) と表現されたが，1908年からは Ministerium (Justizministerium など) に変更された。
- [20] 本訳（Ⅳ），173ページ7行目 Satlov を Satlow に改める。
- [35] 本訳（Ⅳ），175ページ35行目への追加。1822年の訓令によれば，ライプツィヒ市には1813年の命令によって統合刑事管区 (Vereinigtes Kriminalamt) が創設された，とされている。GS 1822, S.187-188. この廃止は1856年である。Klein 1982, S.153.
- [49a] 本訳（Ⅰ），212ページ27行目「軍団司令官」を「陸軍司令官」に改める。

[55] 本訳 (N), 180ページへの追加. 第二軍団創設の後には両軍団の参謀長はザクセン陸軍省参謀部において, 部長に次ぐ地位を占めている. SHB 1900, S. 777; SHB 1914, S. 443.

[56b] 本訳 (I), 214ページ10行目「4人の無任所大臣」への追加訳注. 4人は11月2日に無任所国家大臣に任命された. 11月15日には人民委員政府が内閣の職務を引き継いだ. LZ, 1918, Nr. 256, S. 2369 vom 2. Nov.; LZ, 1918, Nr. 266, S. 2455 vom 15. Nov.

(第2節)

[63a] 本訳 (N), 182ページへの追加. グルーナーは1826年に本領警察委員会の宮廷・司法顧問官となり, 31年5月 (Witzleben 1881, S. 173によれば3月) に H. A. v. チェッシャウの後任として上級宗務委員会長官に任命され, 枢密院 (第二次) の会議に, 枢密顧問官ではなかったけれども, 陪席を許された. Gretschel 1865, S. 714; Schmidt 1966, S. 118.

[63b] 本訳 (N), 182ページへの追加. シャールシュミットは1820年に本領警察委員会の宮廷・司法顧問官, 29年に枢密院の枢密補佐官, 31年に半年間ライプツィヒ市長, その後, 内務省の枢密行政参事官となった. Schmidt 1966, S. 130. 60年にも内務省局長補佐兼委託地代銀行委員・枢密行政参事官であった. SHB 1860, S. 267, 279. 63年には委託地代銀行委員・枢密参事官であった. SHB 1863, S. 342.

[63f] 本訳 (VIII), 251ページへの追加. ④ 1835年の上級・中級行政官庁の裁判権制限法によって, これらの官庁が従来持っていた裁判権は, 行政事項に関するものを除いて通常裁判所に移管された. そのために, 上級宗務委員会, ライプツィヒ宗務委員会と中央軍事裁判委員会 (第二次) は廃止されることになった. Schmidt 1966, S. 301-302; Blaschke 1983(a), S. 618.

[63g] 本訳 (VII), 251ページへの追加. 1835年奉公人規制法. Wuttke 1893, S. 211-224; Schmidt 1966, S. 149. なお, 34年の封地世襲化法を封地規制法・封地世襲化宣言に改める.

[63r] 本訳 (VIII), 252ページへの追加. ライプツィヒ市参事会員の子として生まれ, 1586年に枢密顧問官となり, 89年に本領警察委員会長官となつて, 枢密院 (第一次) を廃止したが, 91年に失脚し, 処刑されたクレルについては Vgl. ADB, Bd. 17, S. 116-122; NDB, Bd. 3, S. 407-408; BWDG 1973, S. 494-495.

[63s] 本訳 (II), 149ページ14行目「国王アントーン」への追加訳注. 彼については Vgl. ADB, Bd. 1, S. 493.

[63t] 本訳 (II), 148ページ13行目「1828年」を「1829年」に改める.

[63u] 本訳 (II), 149ページ3行目「ドイツ関税同盟」への追加訳注. ザクセンの関税同盟加入については Schmidt 1966, S. 153; 諸田 1974, 130-145ページ; Kiesewetter 1988, S. 154-161を参照.

[63v] 本訳 (II), 149ページ9行目「(F.L.) プロイアー」への追加訳注. 1824年に

- 枢密内局外務部顧問官となっていた彼は、31年憲法の草案作成に寄与し、31年には枢密外務参事官兼国家評議会議員であった。Schmidt 1966, S. 129-130, 242; ADB, Bd. 3, S. 320; NDB, Bd. 2, S. 606.
- [63w] 本訳(Ⅱ), 149ページ10行目「フリードリヒ・アウグスト(二世)」への追加訳注。1819年から枢密顧問官であった彼は、国民と開明派官吏に人望があったために、勅命公安委員会設置とともにその議長(9月15日まで)に、9月13日には摂政になった。Stolle 1835, S. 64; Gretsche 1863, S. 653, 713; Böttiger / Flathe 1873, S. 392, 435, 437; Schmidt 1966, S. 104, 109. Vgl. ADB, Bd. 7, S. 790-791; NDB, Bd. 5, S. 576-577; Kosch 1963, S. 358; BWDG 1973, S. 815.
- [63x] 本訳(Ⅱ), 149ページ10行目「ヨハン」への追加訳注。1825年から枢密財務委員会副長官、30年の「九月騒乱」の後には同長官(31年5月まで)兼枢密顧問官であった彼は、摂政となった兄から、勅命公安委員会議長の職務を引き継ぎ、30年9月23日には全國民兵団総司令官(彼のこの任務はきわめて形式的なものであった。Reinhardt 1916, S. 212. ただし、彼は31年3月19日から4月11日までドレーズデンの民兵団司令官であった。Reinhardt 1916, S. 215. Vgl. Schmidt 1966, S. 106.) となった。即位までは国家評議会の初代議長でもあった。Gretsche 1863, S. 654, 713-714; Böttiger 1873, S. 392, 713; Schmidt 1966, S. 104, 110, 242, 246. Vgl. ADB, Bd. 14, S. 387-399; Kosch 1963, S. 608; NDB, Bd. 10, S. 528-529; BWDG 1974, S. 1331-1332. ヨハンはまたフィラレテス(Philalethes)の筆名でダンテの『神曲』のドイツ語訳(Goetttl. Comedie)の第1編を33年にドレーズデンで、第2編を40年にドレーズデンとライプツィヒで、第3編を66年にライプツィヒで出版した。GV 1981, S. 162-163.
- [64i] 本訳(Ⅱ), 150ページ12行目「シュルツェ」への追加訳注。彼は1823年からオーバーアムト統治委員会の宗教・教育顧問官であった。宗教省宗教・教育参事官を辞任したのは47年であった。Schmidt 1966, S. 163-164.
- [64j] 本訳(Ⅱ), 150ページ19行目「数人の大臣」への追加訳注。本訳(K), 129ページ[4]に示されているように、1831年の7人の大臣のうち、外国勤務の経歴のない者は、J. T. J. v. ケネリッツと Ch. G. ミュラーの2人だけである。
- [64m] 本訳(Ⅱ), 152ページ5行目「(J. T. J. v.) ケネリッツ」への追加訳注。彼は1843年にリンデナウの後任の閣僚会議議長になった。NDB, Bd. 12, S. 364; Kretschmar 1956, S. 54; Kosch 1963, S. 683; Schmidt 1966, S. 115; Klein 1982, S. 106; Blaschke 1983(b), S. 631.
- [64n] 本訳(Ⅱ), 152ページ7行目「G. v. ノスティッツ=ヴァルヴィッツ」への追加訳注。彼は1836年に陸軍少将に昇任するとともに退役した。Verloren 1910, S. 384. Vgl. Kretschmar 1956, S. 172; Klein 1982, S. 114.
- [64p] 本訳(Ⅱ), 152ページ8行目「ヴィータースハイム」への追加訳注。彼は1827-30年にフォークトランド県(K), 次いでエルツゲビルゲ県(K), すなわち、ザクセンの中で最も工業化した地方、の県知事(K)となった後、30年に邦経

済委員会の、31年に本領内務委員会の長官、35年に内務省の本省局長に任命された。彼は経済問題に関して最も博識な、改革の協同者であり、邦議会においては大臣就任以前にすでに大臣席から答弁した。Schmidt 1966, S.120. 彼は35-40年には内務省局長・枢密参事官兼ドレーズデン県知事(KD)であった。Klein 1982, S.106, 221. 大臣辞任の後には著作に専念した。ADB, Bd. 55, S.87-88. Vgl. Kosch 1963, S.1186.

[64q] 本訳(Ⅱ), 152ページ9行目「ファルケンシュタイン」への追加訳注。彼は1834年に内務省の枢密行政参事官、35-44年にライプツィヒ県知事(KD)であった。ADB, Bd. 48, S.490; NDB, Bd. 5, S.15; Kosch 1963, S.310-311; Klein 1982, S.432. なお、彼は50-53年には邦宗務委員長官であった。ADB, Bd. 48, S.492; NDB, Bd. 5, S.18. さらに、彼の前任の内務大臣はノスティッツ・ウント・イエンケンドルフ(もと大蔵省局長・枢密参事官。Uebersicht 1832, S.25では単に大蔵省局長)であった。Klein 1982, S.111.

[64r] 本訳(Ⅱ), 152ページ19行目「(Alb. v.) カルロヴィッツ」への追加訳注。1831年から40年までの大臣H. G. v. カルロヴィッツの子であり、1830年の最後の身分制議会に出席した彼は、33年から46年までの邦議会のすべてにおいて上院議員(初めはシェンブルク家代表議員、45年からは国王任命の終身議員)であり、45年からは上院議長であった。彼は49-50年邦議会の上院議員となったが、ボイストの外交政策に反対して、会期終了前にプロイセンに移った。ADB, Bd. 3, S.783-787; NDB, Bd. 3, S.144-145; Schmidt 1966, S.100-101.

[64s] 本訳(Ⅱ), 152ページ27行目「ビーダーマン」への追加訳注。彼は1838年からライプツィヒ大学教授(言語学・国家学)であった。48年にドイツ予備議会議員、次いでザクセン選出のドイツ立憲国民議会議員(初めはヴェルテンベルガー・ホーフ派、後にはアウクスブルガー・ホーフ派)、49年5月に副議長に選出されたが、間もなくフランクフルトを去った。ザクセンの自由派「ドイツ協会」の指導者で、48-53年に下院議員であったが、53年に宗教大臣ボイストによって教授職を剥奪され、ヴァイマルに移った。65年に許されて、ライプツィヒ大学に復帰し、66-76年には下院議員となった。71-74年にはザクセン選出の帝国議会議員(国民自由党)でもあった。NDB, Bd. 2, S.223-224; Kretzschmar 1956, S.210; Kosch 1963, S.112; Schwarz 1965, S.48, 269; BWDG 1973, S.274-275; Obermann 1988, S.441-462

[64t] 本訳(Ⅱ), 153ページ5行目「K. v. ヴェーバー」への追加訳注。彼が23歳の時、上訴院副長官であった彼の父は貴族に列せられた。彼は1843年に閣僚会議補佐官になり、49年には邦中央文書館館長(79年まで)になったが、その後も内閣の任務をしばしば委託され、66年には邦統治委員会の書記に任ぜられた。72年には枢密参事官の称号を与えられた。ADB, Bd. 41, S.345-349; Kretzschmar 1955 (a), S.15. 彼は45年には枢密補佐官・本省参事官であった。SHB 1845, S.38.

[64u] 本訳(Ⅱ), 153ページ14行目「ブラウン」への追加訳注。ブラウン市の弁護士で、1839年から下院議員であった彼が、下院議長になったのは45年である。

ADB, Bd. 3, S. 269; Schimmel 1912, S. 37, 41; Kosch 1953, S. 154. なお, 50-68年にはブラウエン郡郡長・枢密行政参事官であった. Kretzschmar 1956, S. 53; Klein 1982, S. 265. 49-62年にも下院議員(57/58年には副議長)であった. Schimmel 1912, S. 67, 72, 74-78, 85. 1867年の半年間はザクセン選出の北ドイツ連邦議会議員(旧自由派)であった. Schwarz 1965, S. 278.

[64v] 本訳(Ⅱ), 153ページ17行目「プフォルテン」への追加訳注. 彼は1843年にライプツィヒ大学法学部ローマ法教授となり, 45年に学長となった(宮廷参事官). ADB, Bd. 25, S. 695; Kretzschmar 1956, S. 53; Kosch 1963, S. 977; BWDG 1974, S. 2152. 宮廷参事官の称号をすでに45年には得ていた. SHB 1845, S. 241.

[64w] 本訳(Ⅱ), 153ページ20行目「ゲオルギー」への追加訳注. ミーラウ市の工場主である彼は, 1839年から下院議員であった. Schimmel 1912, S. 38, 40-41. 49/50年に上院議長であり, 54年から66年までも商工業代表下院議員として確認される. SHB 1850, S. 44; SHB 1854, S. 59; SHB 1865/66, S. 101. Vgl. Schimmel 1912, S. 74, 76, 78.

[64x] 本訳(Ⅱ), 153ページ21行目「ブットラル將軍」への追加訳注. 彼は1846年に陸軍少将になった. Verlohren 1910, S. 514. Vgl. Kretzschmar 1956, S. 145.

[64y] 本訳(Ⅱ), 153ページ25行目「オーバーレンダー」への追加訳注. 彼は1840年から下院議員であった. Schimmel 1912, S. 38. 大臣辞任の後, 火災保険委員会議長・枢密行政参事官となった(68年まで). Kretzschmar 1956, S. 65.

[65e] 本訳(Ⅱ), 155ページ15行目「(G.F.) ヘルト」への追加訳注. 彼は大審院参事官であった. ADB, Bd. 11, S. 680; Kretzschmar 1956, S. 251; Kosch 1963, S. 498; Klein 1982, S. 108. 1841年にすでにそうであった. SHB 1841, S. 55. 彼は47年には, 大審院参事官の称号を持ちつつ法務省本省参事官の職務に就いていた. SHB 1847, S. 56. 彼は50-54年にも法務省本省参事官の職務に就いていた(枢密参事官). SHB 1850, S. 57; SHB 1854, S. 68. 次号の SHB 1857 (Vgl. S. 91) には記載がない. 49/50年には下院副議長であった. SHB 1850, S. 46.

[65f] 本訳(Ⅱ), 155ページ16行目「ヴァインリヒ」への追加訳注. エルランゲン大学経済学教授の彼は1847年に内務省本省参事官・枢密行政参事官(SLeBi 1930, S. 375によれば46年に本省局長)に任命された. ADB, Bd. 41, S. 508. Vgl. SHB 1847, S. 193; Kretzschmar 1956, S. 305. 大臣辞任後の彼は内務省局長・枢密参事官となり, 70年までその職にあった. ADB, Bd. 41, S. 509; SLeBi 1941, S. 375, 392, 414. 49/50年には上院議員であった. SHB 1850, S. 45.

[65g] 本訳(Ⅱ), 155ページ16行目「エーレンシュタイン」への追加訳注. 彼は大蔵省枢密財務参事官であった. Kretzschmar 1956, S. 304; Klein 1982, S. 110. 1843年にすでにそうであった. SHB 1843, S. 118. 大臣辞任の後, 大蔵省局長に任命された. Klein 1982, S. 110. 50-60年には大蔵省局長・枢密参事官であった. SHB 1850, S. 113; SHB 1860, S. 168. 次号の SHB 1863 (Vgl. S. 195) には記載がない.

- [65h] 本訳(Ⅱ), 155ページ17行目「ボイスト」への追加訳注. 彼は1836年にベルリン駐在外務書記官となり, 38年にパリに転任, 41年にミュンヘン駐在の公使に昇任, 46年にロンドンに, 48年にベルリンに転任した. ADB, Bd. 46, S. 494-496; SLBi 1938, S. 1-11; NDB, Bd. 2, S. 198; Kosch 1963, S. 109; BWDG 1973, S. 270-271; Blaschke 1983(a), S. 636. Vgl. Kretzschmar 1956, S. 53-54.
- [65i] 本訳(Ⅱ), 155ページ18行目「ラーベンホルスト」への追加訳注. 彼の大尉任官は1840年, 大佐任官は49年であり, その期間は9年である. ADB, Bd. 27, S. 87-88; Verloren 1910, S. 422. 彼の陸軍大臣任命は3月8日である. Blaschke 1983(a), S. 634. 彼は56年に貴族に列せられた. ADB, Bd. 27, S. 88; Kretzschmar 1956, S. 304; Blaschke 1983(b), S. 291.
- [65j] 本訳(Ⅱ), 156ページ12行目「チルナー」への追加訳注. 彼は48年臨時邦議会左派の中心人物で, 49年邦議会の下院議長であった. バーデンのドイツ憲法戦役に参加し, 次いでスイス, アメリカに移った. 65年に恩赦を受けて帰国したが, 弁護士資格の再賦与は許されなかった. ADB, Bd. 39, S. 66; Obermann 1988, S. 297-328; Kretzschmar 1956, S. 134.
- [66b] 本訳(Ⅱ), 157ページ9行目「チンスキー」への追加訳注. 弁護士の彼は, ザクセン改革の過程で中央官庁に招かれたライプツィヒ市民のひとりであった. Schmidt 1966, S. 131. 彼は1832年には本領司法委員会の宮廷・司法参事官であり, 37年にはドレーズデン控訴裁判所の参事官, 47年には副長官 (Klein 1982, S. 108によれば副長官・枢密参事官) であった. Uebersicht 1832, S. 18; SHB 1837, S. 138; SHB 1847, S. 58. 彼は56年に貴族に列せられた. Kretzschmar 1956, S. 370; Blaschke 1983(b), S. 294.
- [66c] 本訳(Ⅱ), 158ページ4行目「トット」への追加訳注. 彼は1832年からアードルフ市長, 36年から49年まで下院議員であった. 48年3月にはドイツ準備議会議員に選出され, 三月内閣によってドイツ連盟憲法改正会議のザクセン政府代表・枢密行政参事官に, 連盟議会解散の後にはドイツ暫定中央権力のザクセン政府代表に, さらに G.F. ヘルト内閣によって内務省局長に任命された. 中央派の代表として臨時政府委員に選ばれた彼は, 5月6日夜にはドレーズデンを去って, しばらく国内に潜伏した後, スイスに逃がれた. ADB, Bd. 38, S. 408-409; Kretzschmar 1956, S. 180.
- [67] 本訳(Ⅳ), 183ページへの追加. 管区(A)とはほぼ同種の地方官庁として直轄領管区(Direktorialamt), 本領管区(Erbamt), 陪臣裁判区(Gericht), 管区(Jd — Judizium), 管区(Js — Justitiariat), 修道院領管区(Klosteramt), 溶鋸所管区(Mühlenamt), 大聖堂代官領管区(Prokuraturamt), 国立学校領管区(Schulamt), 大聖堂参事会領管区(Stiftsamt)があった. 松尾1990, 4ページ.
- [67a] 本訳(Ⅷ), 254ページへの追加. 祖国協会の禁止の後, 小市民的民主主義者はしばしば国民協会などを結成したが, これらの政治結社も1849年末までに警察によって解散させられた. そこで彼らによって50年初に組織されたのが, いわゆる「自由共同体」あるいは自由キリスト教会であった. Kolbe 1970, S. 81.

- [67j] 本訳(Ⅱ), 158ページ6行目「ホイブナー」への追加訳注. 1843年からフライベルク特別管区長であった彼は, 48年にザクセン選出のドイツ立憲国民議会議員(ドイッチャー・ホーフ派), 49年に上院議員となり, 穏健左派の代表として臨時政府委員に選ばれた. 69-72年には下院議員となった. ADB, Bd. 50, S. 287-292; Kretzschmar 1956, S. 348; Kosch 1963, S. 522; Schwarz 1965, S. 67.
- [67k] 本訳(Ⅱ), 158ページ7行目「バクーニン」への追加訳注. 彼は1848年末からライプツィヒに, 49年3月からドレーズデンに住んで, 民主派の『ドレーズデン新聞』の編集を指導した. ドレーズデン五月蜂起に際しては臨時政府の軍事顧問であった. Kretzschmar 1956, S. 392; Weber 1970, S. 345-346; Zeise 1989(a), S. 361, 363.
- [67m] 本訳(Ⅱ), 158ページ24行目「フリーゼン」への追加訳注. 彼は1844年に行政参事官の称号を与えられ, 46年には内務省最年少の補佐官(SHB 1847, S. 193によれば本省参事官)になった. なお, 彼は53-58年にはツヴィッカウ県知事(KD)であった. ADB, Bd. 49, S. 144-145; SLeBi 1938, S. 162, 165; NDB, Bd. 5, S. 612-613; Kosch 1963, S. 360; BWDG 1973, S. 825-826; Klein 1982, S. 432.
- [67n] 本訳(Ⅱ), 158ページ25行目「ペーア」への追加訳注. 彼は1839年に大蔵省枢密財務参事官であり, 47年にもそうであった. SHB 1839, S. 140; SHB 1847, S. 116. 49年に内務省枢密参事官に, 間もなく大蔵大臣に任命された. Kosch 1963, S. 85. 彼は59年に貴族に列せられた. ADB, Bd. 2, S. 285; Kretzschmar 1956, S. 400.
- [67p] 本訳(Ⅱ), 160ページ1行目「3人」への追加訳注. 1843年にライプツィヒ大学ドイツ語・ドイツ文学教授になっていたハウプトは, 反逆罪の裁判では無罪とされたが, 宗教大臣ボイストによって51年4月に懲戒免職とされ, 53年にベルリン大学教授となった. ADB, Bd. 11, S. 73; NDB, Bd. 8, S. 101. 1847年にライプツィヒ大学言語学・考古学教授になっていたヤーンは, 54年にボン大学教授となった. ADB, Bd. 13, S. 672, 675; NDB, Bd. 10, S. 304. 1848年にライプツィヒ大学ローマ法教授となっていたモムゼンは, 52年にチューリヒ大学教授になった. Kretzschmar 1956, S. 158; Kosch 1963, S. 871; BWDG 1974, S. 1925-1926; ザーハー(望田訳), ヴェーラー 1982所収, 200ページ.
- [68a] 本訳(Ⅳ), 183ページへの追加. ボイストは1852年7月31日に内務大臣に任命された. 1992年9月14日付け国立ドレーズデン文書館(現ザクセン州立中央文書館)回答. したがって, 本訳(Ⅰ), 214ページ13行目「1853年」は1852年に訂正されるべきである.
- [68e] 本訳(Ⅱ), 163ページ23行目『神曲』への追加訳注. 本訳(K), 117ページ, 訳注[63x]参照.
- [70a] 本訳(Ⅱ), 165ページ5行目「ロイニンク」への追加訳注. 彼は1844年に農業中央協会の事務担当者(政府代表)に, 50年に同協会が農業協議会に改組されるとともに, その事務総長兼内務省農業問題担当報告参事官になり, 55年に枢密行政参事官の称号を与えられた. SLeBi 1930, S. 333; Pönicke 1935, S. 172, 176-177, 197; 松尾 1990, 269, 271-272ページ. なお, SHB 1870, S. 559には, 退

任した枢密行政参事官ロイニク云々の記述がある。したがって、彼の退任の時期は72年ではなく、69年であろう。

- [71h] 本訳(Ⅱ), 166ページ5行目「シュナイダー」への追加訳注。彼はすでに1860年にその官職に就いていた。SHB 1860, S. 98.
- [71i] 本訳(Ⅱ), 166ページ7行目「エンゲル」への追加訳注。彼は1849年に陸軍中將になり、65年に退役していた。Verlohren 1910, S. 208.
- [71j] 本訳(Ⅱ), 169ページ2行目「ブリュール」への追加訳注。1731年に枢密内局内務部主任・枢密顧問官に、33年に内局大臣(内務部と外務部を他の大臣と共同担当)に、41年に内務部、外務部、陸軍部の全3部を担当する内局大臣に、46年にはザクセン史上前例のない総理大臣になり、数多くの官職(諮問大臣、多くの財務関係官庁の長官など、さらに、陸軍大將)を兼任した彼についてはVgl. ADB, Bd. 3, S. 411-417; NDB, Bd. 2, S. 660-661; Philipp 1920, S. 8, 36-37, 41, 66, 90-92, 96; Kosch 1963, S. 171; BWDG 1973, S. 364-365.

(第3節)

- [71k] 本訳(Ⅲ), 96ページ16行目「ファブリス」への追加訳注。彼は1865年から陸軍少将であった。ADB, Bd. 48, S. 477; SLeBi 1938, S. 77; Verlohren 1910, S. 210; Kosch 1963, S. 307. Vgl. NDB, Bd. 4, S. 729.
- [71m] 本訳(Ⅲ), 97ページ14行目「H. v. ノスティッツ＝ヴァルヴィッツ」への追加訳注。彼は1857-62年に2郡の郡長、62-66年にバウツェン県知事(KD)であった。Kosch 1963, S. 928; Klein 1982, S. 443. 74-77年にはザクセン選出の帝国議會議員(帝国党)であった。Schwarz 1965, S. 414. 彼は1839-46年の大臣 G. v. ノスティッツ＝ヴァルヴィッツの子である。大臣辞任の後、上院議員となった。Ruß 1906, S. 8-9. 1892-1905年には国王任命の終身上院議員であった。SHB 1892/93, S. 185; SHB 1905, S. 153.
- [72a] 本訳(Ⅷ), 256ページへの追加。ザクセン選出帝国議會議員(定数23)の党派別構成は次ページ別表第10のとおりであった。Ritter 1980, S. 89.
- [73b] 本訳(Ⅳ), 184ページへの追加。ディラーは1876年に大蔵省報告参事官・枢密財務参事官に、90年に大蔵省第一局局長・枢密参事官になった。Ruß 1914, S. 83. なお、大蔵省の局は王国最後の『国政便覧』においても第一ないし第三局とされている。SHB 1914, S. 149. 第一局は1913年頃には総務および租税事項を担当していた。Meinert 1955(b), S. 207.
- [73k] 本訳(Ⅲ), 99ページ5行目「ゲルバー」への追加訳注。彼は1863年にライプツィヒ大学法学部ドイツ私法・国法・教会法教授、67年にザクセン選出の北ドイツ連邦議會議員(旧保守派)、大臣任命直前には邦教会會議議長になった。78年に貴族に列せられた。ADB, Bd. 49, S. 293, 296; NDB, Bd. 6, S. 251; SLeBi 1930, S. 95-97, 105; Kosch 1963, S. 384; Schwarz 1965, S. 320; Blaschke 1983(b), S. 287. 教授時代に彼は枢密法務参事官の称号を得ていた。Klein 1982, S. 113. すでに65年にそうであった。SHB 1865/66, S. 483.
- [73m] 本訳(Ⅲ), 101ページ6行目「L. R. v. ケネリッツ」への追加訳注。彼は

別表第10. ザクセン選出帝国議会議員の党派別構成

年	保守党	帝国党	自由民主党	自由派	進歩主義党	自連主義	自思想党	自由思想党	社会民主党	改革党	反セム党	経済連合
1871	—	—	8	5	8	—	—	—	2	—	—	—
1874	1	5	7	—	4	—	—	—	6	—	—	—
1877	4	3	7	—	2	—	—	—	7	—	—	—
1878	4	5	5	—	3	—	—	—	6	—	—	—
1881	5	4	5	—	4	1	—	—	4	—	—	—
1884	8	3	3	—	—	—	4	—	5	—	—	—
1887	8	4	10	—	—	—	1	—	—	—	—	—
1890	10	3	3	—	—	—	1	—	6	—	—	—
1893	5	1	2	—	—	—	—	2	7	6	—	—
1898	5	—	4	—	—	—	—	—	11	3	—	—
1903	—	—	—	—	—	—	—	—	22	—	1	—
1907	2	1	6	—	—	—	—	2	8	3	—	1
1912	1	1	1	—	—	—	—	—	19	1	—	—

74-75年にツヴィッカウ県知事 (KH), 76年にライプツィヒ県知事であった。Klein 1982, S. 439. Vgl. Kosch 1963, S. 683. 74-77年にはザクセン選出の帝国議会議員(帝国党)であった。Schwarz 1965, S. 373. 彼は1831-48年の大臣 J. T. J. v. ケネリッツの甥である。NDB, Bd. 12, S. 364.

[73n] 本訳 (Ⅲ), 101ページ18行目「アーベケン」への追加訳注。彼は法務省秘密法務参事官であった。Klein 1982, S. 108. 『国勢便覧』では1867年以後、法務省本省参事官となっている。SHB 1867, S. 125. Vgl. Kosch 1963, S. 3.

[73p] 本訳 (Ⅲ), 102ページ11行目「アルベルト」への追加訳注。彼は1867年から73年までドイツ第12軍団(ザクセン軍団)司令官・陸軍大将であった。Bredow 1905, S. 1385; Rösler 1974, S. 62. Vgl. NDB, Bd. 1, S. 132; BWDG 1973, S. 45-46.

[73q] 本訳 (Ⅲ), 103ページ20行目「成果を収めた。」への追加訳注。リープクネヒトのような社会民主党員の政治犯が1834年本籍法に基づいて追放されることに對して、下院議員ベーベルは82年の下院に、移転の自由を最大限保障する法案を政府が次の邦議会に提出することを求める提案をしたが、下院はこの提案を事実上否決した。そこでベーベルは同年10月に帝国議会に請願書を送り、ザクセン本籍法第19条第2項に関するザクセン政府の解釈は1867年帝国移転自由法第3条第1項などに矛盾し、ザクセン本籍法第17条第4項は上記帝国法第3条および第12条によってすでに廃止されている、と訴えた。この請願は採択され、帝国議会は、必

- 要な措置を取ることを帝国宰相に要請した。Bebel 1914, S. 214-216.
- [73r] 本訳(Ⅲ), 104ページ3行目「シューリヒ」への追加訳注。彼は法務省局長・枢密参事官であった。Klein 1982, S. 108. すでに SHB 1890/91, S. 179では、そうである。SHB 1888/89, S. 180では、まだライプツィヒ地方裁判所所長である。
- [73s] 本訳(Ⅲ), 104ページ14行目「メッチュ」への追加訳注。彼は1874年から2郡の郡長を経て、80-87年にドレースデン＝ノイシュタット郡郡長であった。Klein 1982, S. 442. 88年には内務省枢密行政参事官であった。SHB 1888/89, S. 405. 89年には連邦参議院ザクセン政府代表・枢密参事官になった。Kosch 1963, S. 849. SHB 1890/91, S. 605では外務省本省参事官・枢密参事官である。
- [73t] 本訳(Ⅲ), 105ページ27行目「メーネルト」への追加訳注。彼は1885年から1909年まで下院議員であった。Schimmel 1912, S. 101, 129. 彼は1899年から1909年まで下院議長であった。Czok 1989, S. 613. 1885年から(1922年にも)農業信用協会会長、1909-18年に上院議員であった。Wer 1922, S. 1019. 上院においては国王任命の騎士領所有者議員であった。SHB 1910, S. 96; SHB 1914, S. 77. 1890-93年にはザクセン選出の帝国議会議員(保守党)でもあった。Schwarz 1965, S. 399. 1908年に枢密参事官(SHB 1907, S. 84 ではまだそうではない。)の称号を得た。Wer 1908, S. 889. 03-22年にはドイツ農業協会の副議長であった。Fricke 1984, S. 167.
- [73u] 本訳(Ⅲ), 106ページ10行目「テュメル」への追加訳注。彼は大蔵省局長・枢密参事官であった。Klein 1982, S. 110. すでに1873年にそうであった。SHB 1873, S. 247.
- [73v] 本訳(Ⅲ), 106ページ11行目「プラーニッツ」への追加訳注。彼は1888年に陸軍少将となった。Verlohren 1910, S. 405. Vgl. Klein 1982, S. 115.
- [73w] 本訳(Ⅲ), 106ページ12行目「P. v. ザイデヴィッツ」への追加訳注。彼は1879年から宗教省の枢密行政参事官であった。Ruß 1911, S. 21. Vgl. Kosch 1963, S. 1108.
- [73x] 本訳(Ⅲ), 106ページ14行目「(W. v.) ヴァッツドルフ」への追加訳注。彼は1870年に外務省本省参事官・行政参事官となり、その称号は74年に枢密外務参事官、82年に枢密参事官となった。SHB 1870, S. 548; SHB 1874, S. 396; SHB 1882/83, S. 534. 大臣任命前には宮内省会計官(Kämmerer)・枢密参事官であった。Klein 1982, S. 110. すでに90年からそうであった。SHB 1890/91, S. 151.
- [73y] 本訳(Ⅲ), 106ページ15行目「リュエーガー」への追加訳注。彼は1895年から検事総長(90年から枢密参事官)であり、1907年に貴族に列せられた。Wer 1914, S. 1419. Vgl. Klein 1982, S. 109; Blaschke 1983(b), S. 291.
- [75a] 本訳(Ⅲ), 108ページ5行目「ゲオルク」への追加訳注。彼は1873年から1900年までドイツ第12軍団(ザクセン軍団, 1899年からはザクセン第一軍団)司令官・陸軍大将であった。Bredow 1905, S. 1385; ADB, Bd. 6, S. 228; Rösler 1974, S. 62.

- [75b] 本訳(Ⅲ), 108ページ21行目「フリードリヒ・アウグスト三世」への追加訳注。彼は1902年から04年までドイツ第12軍団(ザクセン第一軍団)司令官・陸軍大将であった。Bredow 1905, S. 1385; Rösler 1974, S. 62. Vgl. NDB, Bd. 5, S. 577; BWDG 1973, S. 815-816.
- [75c] 本訳(Ⅲ), 110ページ6行目「ホーエンタール」への追加訳注。彼はベルリン駐在公使・枢密参事官であった。Klein 1982, S. 112. 1885年からベルリン駐在公使であった。Kosch 1963, S. 559. 1883年から上院議員, 95年から枢密参事官であった。Wer 1909, S. 613. 上院においては国王任命の騎士領所有者議員であった。SHB 1884/85, S. 142. ただし, 1886年にはすでに議員ではない。Vgl. SHB 1886/87, S. 151.
- [75d] 本訳(Ⅲ), 110ページ16行目「ハインク」への追加訳注。彼は1897年から2郡の郡長を経て, 1906年から内務省報告参事官であった。Klein 1982, S. 380, 436. 彼は1907年には内務省報告参事官・枢密行政参事官, 11年には(14年にも)内務省局長・枢密参事官であった。SHB 1907, S. 283; SHB 1911, S. 315; SHB 1914, S. 292. なお, SHBF 1921 (S. 62) には記載がない。
- [75e] 本訳(Ⅲ), 110ページ16行目「(A.) ヴァッハ」への追加訳注。彼は1875年から1920年までライプツィヒ大学法学部刑法教授であった。Czok 1989, S. 617. 彼は1895年には枢密参事官の称号を得ている。SHB 1895, S. 606. 1900年から(14年にも)ライプツィヒ大学選出上院議員として確認される。SHB 1900, S. 250; SHB 1914, S. 76.
- [75f] 本訳(Ⅲ), 111ページ26行目「シュリーベン」への追加訳注。彼は1898-1906年にバウツェン県知事(KH)であった。Klein 1982, S. 447.
- [75g] 本訳(Ⅲ), 112ページ18行目「フィッツトゥーム」への追加訳注。彼は1901-06年にアナベルク郡郡長であり, 06-09年にはベルリン駐在公使であった。Klein 1982, S. 112, 291.
- [76b] 本訳(Ⅲ), 113ページ1行目「(H.) ベック」への追加訳注。彼は1895年からフライベルク市長, 96-1908年にケムニッツ市の上級市長であり, 95-08年には国王任命の都市代表上院議員でもあった。十一月革命直前に貴族に列せられた。SHB 1896, S. 218; Wer 1911, S. 73; Kosch 1963, S. 79; Klein 1982, S. 427; Blaschke 1983(b), S. 285.
- [76c] 本訳(Ⅲ), 113ページ17-18行目「E. v. ザイデヴィッツ」への追加訳注。彼は大蔵省局長・枢密参事官であった。Klein 1982, S. 110. Vgl. Kosch 1963, S. 1108. すでに1906年にそうであった。SHB 1906, S. 224.
- [76d] 本訳(Ⅲ), 113ページ22行目「オットー」への追加訳注。彼は1890年から法務省報告参事官・枢密法務参事官, 1901年から検事総長・枢密参事官であった。Otto 1888の著者でもある。07年に貴族に列せられた。Ruß 1912, S. 33-34. Vgl. Klein 1982, S. 109; Blaschke 1983(b), S. 291.
- [77a] 本訳(Ⅲ), 114ページ10行目「ナーゲル」への追加訳注。彼は1894年にライプツィヒ地方裁判所主任, 97年にザクセン邦高等裁判所参事官, 99年に帝国検事

となった。Wer 1912, S. 1113.

[78a] 本訳 (IV), 185ページへの追加。Ad. v. カルロヴィッツは1913年に陸軍中将, 14年5月に陸軍大臣となった。第一次世界大戦中は前線司令官となった。KSSB 1915, S. 5; NDB, Bd. 3, S. 144. ヴィルスドルフは, 1911年に陸軍少将となり, 貴族に列せられた。13年に退役し, 14年10月に陸軍大臣代理, 15年に陸軍大臣となった。KSSB 1916, S. 5.

[78d] 本訳 (III), 115ページ14行目「ハウゼン」への追加訳注。彼は1901年に陸軍大将となった。Verlohren 1910, S. 268. Vgl. Bredow 1905, S. 1385; Klein 1982, S. 115. 10年に元帥となり, 12年に退役した。第一次大戦の勃発とともに現役に復帰し, 初期には西部戦線の司令官となった。NDB, Bd. 8, S. 113; BWDG 1973, S. 1043.

[78e] 本訳 (III), 117ページ3行目「ルードルフ・ハインツェ」への追加訳注。もと裁判官の彼は1907-12年にザクセン選出の帝国議会議員 (国民自由党), 13年に帝国最高裁判所参事官, 14-15年にワルシャワ総督府勤務, 15-16年にザクセン下院議員であった。18年7月に法務大臣となり, 10月26日にはさらに首席国家大臣と外務大臣を兼任した。彼は19-28年にはザクセン選出のドイツ立憲国民議会議員・ドイツ国議会議員 (ドイツ人民党), 20-21年と22-23年にはドイツ国法務大臣であった。彼が死んだのは28年5月16日である。LZ, 1918, Nr. 251, S. 2323 vom 26. Okt.; Schwarz 1965, S. 342, 666; Heinze 1972, S. 139-140. Vgl. NDB, Bd. 8, S. 449; Kosch 1963, S. 497; Fricke 1984, S. 413, 428-430.

[78f] 本訳 (III), 117ページ10行目「10月26日」への追加訳注。H. v. ベックと E. v. ザイデヴィッツが辞任したのは10月25日であった。LZ, 1918, Nr. 250, S. 2315 vom 25. Okt.

[78g] 本訳 (III), 117ページ13行目「A. v. ノスティッツ=ヴァルヴィッツ」への追加訳注。彼は1906-08年にザクセン外務省外務参事官であったが, 08-10年にはザクセン=ヴァイマルの報告参事官となり, 10年にはふたたびザクセンに帰って2郡の郡長 (16年まで), 16年にヴィーン駐在公使となった。Volz 1931, S. 1339; Kosch 1963, S. 928; Klein 1982, S. 114, 392, 443.

[78h] 本訳 (III), 117ページ18行目「コッホ」への追加訳注。彼は1910年に内務省報告参事官・枢密行政参事官となり, 邦食糧部設置とともにその部長, 16年に内務省局長 (おそらく同時に枢密参事官) となった。ザクセン人民議会議員 (ドイツ人民党) に選出されたが, 間もなく辞任し, 19年2月に臨時政府によってベルリン駐在公使に任命され, ヴァイマル憲法の審議に当たってザクセン政府を代表することになった。21年にブラーハ駐在ドイツ国公使 (35年まで) となった。Volz 1930, S. 966; Wer 1935, S. 846; Klein 1982, S. 112. 彼の没年は不明である。

[78i] 本訳 (III), 117ページ18行目「(M. O.) シュレーダー」への追加訳注。彼は1897年からフライベルク市長, 99年からプラウエン市の上級市長, 1902年から大蔵省局長である。上院議員でもあった。Klein 1982, S. 110, 403; Fenske 1983, S. 292. 1903年には大蔵省局長・枢密参事官, 14年にもそうであった。SHB

- 1903, S. 379; SHB 1914, S. 149. 1898-1902年に国王任命の都市代表上院議員であった。SHB 1898, S. 241; SHB 1902, S. 276. 10年には(14年にも)閣僚会議と福音事項閣僚協議会の報告参事官(07-09年にはその代理)を兼務している。SHB 1907, S. 81-81; SHB 1909, S. 91-92; SHB 1910, S. 93-94; SHB 1914, S. 74-75. 21-25年にはヴルツェン参事会聖堂の構成員である。SHBF 1921, S. 242; SHBF 1925, S. 261.
- [79] 本訳(Ⅳ), 185ページへの追加。労働組合書記の M. ヘルトは1909-18年に下院議員, 21-27年に邦議会議員であり, 19-20年に労働大臣, 20-23年と23-24年に大蔵大臣, 24-29年に首相となった。Kosch 1963, S. 500; Klein 1982, S. 116, 120; Fenske 1983, S. 327.
- [79a] 本訳(Ⅳ), 185ページへの追加。商人のギュンターは1903-18年に下院議員, 19-20年にザクセン人民議会議員, 22-26年に邦議会議員であった。07-12年にザクセン選出の帝国議会議員(自由思想国民党), 19年にドイツ立憲国民議会議員(ドイツ民主党)でもあった。Wer 1922, S. 539; Kosch 1963, S. 436; Schwarz 1965, S. 331; Blaschke 1983(b), S. 287.
- [79b] 本訳(Ⅲ), 117ページ23行目「フレスドルフ」への追加訳注。陶工の彼は1895-1900年と05-18年に下院議員, 引き続いて22年まで邦議会議員であり, 20-22年には邦議会議長になった。03-07年にはザクセン選出の帝国議会議員(社会民主党)でもあった。Kosch 1963, S. 339; Schwarz 1965, S. 312; Blaschke 1983(b), S. 287; Schröder 1986, S. 108-109.
- [79c] 本訳(Ⅲ), 117ページ24行目「ニッチェケ」への追加訳注。商人の彼は1909-18年に下院議員, 19-20年に邦議会議員兼大蔵大臣であった。19-20年にはザクセン選出のドイツ立憲国民議会議員(ドイツ民主党)でもあった。SHBF 1927, S. 10; Schwarz 1965, S. 720; Klein 1982, S. 120; Fenske 1983, S. 329. Vgl. Kosch 1963, S. 924.
- [79d] 本訳(Ⅲ), 118ページ9行目「フライスナー」への追加訳注。編集者の彼は1908年から18年まで下院議員, 引き続いて20年まで邦議会議員, 18年11月15日から19年1月20日まで軍事大臣, 20-22年と23-24年に宗教大臣(後に国民教育大臣)であった。20年から33年までザクセン選出のドイツ国議会議員(独立社会民主党, 後に社会民主党)でもあった。33年に一時逮捕された。Osterroth 1960, S. 83-84; Kosch 1963, S. 332; Schwarz 1965, S. 648; Klein 1982, S. 121, 123; Fenske 1983, S. 326; Schröder 1986, S. 107.
- [80c] 本訳(Ⅲ), 118ページ22-23行目「リピンスキー」への追加訳注。ライプツィヒの党活動家・文筆家であり, 1903-07年にザクセン選出の帝国議会議員(社会民主党)であった彼は, 18年11月15日から19年1月21日までザクセン人民委員政府の主席, 内務大臣兼外務大臣となった。19-20年にザクセン人民議会副議長, 20-23年に内務大臣, また, 20-33年にはザクセン選出のドイツ国議会議員(独立社会民主党, 後に社会民主党)であった。1934-35年に逮捕された。Volz 1931, S. 1133-1134; NDB, Bd. 14, S. 643-644; Osterroth 1960, S. 201; Kosch 1963, S. 774; Schwarz 1965, S. 390, 705; Klein 1982, S. 116-118; Fenske 1983, S. 328;

Schröder 1986, S. 157.

[80d] 本訳(Ⅲ), 119ページ20-21行目「Afranisches Ecce」への追加訳注. これは第11冊で, 編者は Ralph Ruß である.

[83e] 本訳(Ⅲ), 122ページ30行目「ツァイグナー」への追加訳注. もと裁判官で, 1921-23年に法務大臣であった彼は, 23年に首相に就任した後, 共産党との連立内閣を発足させると, ドイツ国政府によって逮捕された. 3年の禁錮刑から釈放させた後も, しばしば逮捕された. 46年からライプツィヒ市の上級市長, ザクセン州議会議員, 48年から(東)ドイツ人民評議会議員であった. 社会民主党, 46年から社会主義統一党に所属した. BWDG 1975, S. 3300-3301; Klein 1982, S. 116, 122; Fenske 1983, S. 330.

(第4節)

[85d] 本訳(Ⅳ), 161ページ2行目「ルンペルト」への追加訳注. 彼は1891-98年に2郡の郡長, 98-1906年に内務省報告参事官・枢密行政参事官, 06-09年にドレーズデン県知事(KH), 09年から内務省局長であった. Klein 1982, S. 312, 394, 446. 14年にも内務省局長・枢密参事官であった. SHB 1914, S. 292. 02-06年には閣僚会議と福音事項閣僚協議会の報告参事官代理を兼務していた. SHB 1902, S. 272, 274; SHB 1906, S. 160-161.

[85e] 本訳(Ⅳ), 161ページ2行目「シェルヒャー」への追加訳注. 彼は1898年に内務省報告参事官・枢密行政参事官, 05-18年には内務省局長・枢密参事官であった. Mading 1991, S. 255-259.

[85f] 本訳(Ⅳ), 161ページ23行目「ヴェーヌス」への追加訳注. 彼は1919-28年に2郡の, 28-44年にドレーズデン郡の郡長(39年から郡長[L])であった. Klein 1982, S. 450.

[88c] 本訳(Ⅳ), 165ページ14行目「キュルツ」への追加訳注. 彼は1912-23年にツィッタウ市の上級市長, 23-26年にドレーズデン市の第二市長, 31-33年に同市の上級市長であり, 19-32年にはザクセン選出のドイツ立憲国民議会およびドイツ国議会議員(ドイツ民主党, 後にドイツ国家党), 26-27年にはドイツ国内務大臣であった. ナチスによって33年に市長を解任され, 34年には一時逮捕された. 45年11月に自由民主党議長となったが, 政治的には無力であった. Kosch 1963, S. 719; Schwarz 1965, S. 697-698; BWDG 1974, S. 1565-1566; Klein 1982, S. 330, 439; Fricke 1983, S. 600-602, 605, 613; Hofmann 1991, S. 337-340.

(第2章)

[2] 本訳(Ⅴ), 165ページへの追加. ハイニッツは七年戦争敗戦後の「国家再建」に際して1763年にザクセンの中央鉱山官吏, 64年には邦経済委員会委員となったが, 政府中枢と対立して, 74年に辞任した. 77年にプロイセンの大臣に就任し, シュタインなどに影響を与えた. Vgl. ADB, Bd. 55, S. 493-500; NDB, Bd. 9, S. 96-98; Schlechte 1958, S. 72-75, 122.

[4] 本訳(Ⅴ), 166ページ9行目「すなわち」以下を削除し, 以下の文章に変更す

る。閣僚会議議長兼内務大臣リンデナウ (Vgl. ADB, Bd. 18, S. 681-686; SLeBi 1938, S. 242-257; NDB, Bd. 14, S. 592-593; Kosch 1963, S. 772; BWDG 1974, S. 1659-1660; Blaschke 1983(a), S. 612; Ruhland 1984, S. 73-83; Blaschke 1991 (c), S. 140-145. 彼はザクセン＝アルテンブルクから48年ドイツ立憲国民会議議員に選出されたが、9月にはフランクフルトを去った。Schwarz 1966, S. 77. [ここには、彼の政治的立場は明記されていない。Schmidt 1966, S. 113; NDB, Bd. 14, S. 593; Blaschke 1991(c), S. 144 によれば中央左派、Ruhland 1984, S. 80によれば左派であった。]) は小邦ザクセン＝アルテンブルクの首席大臣を経て、1827年からドイツ連盟議会のザクセン政府代表、29年から枢密顧問官兼邦経済委員長官であり、30年9月13日に前の官職から枢密内局内務部担当内局大臣に任命された。イギリス人を母とする陸軍大臣ツェッチュヴィッツ (Vgl. ADB, Bd. 45, S. 146-147; Verlohren 1910, S. 577) は1817年に陸軍少将となり、18年からドイツ連盟議会のザクセン陸軍代表、21年から枢密顧問官兼陸軍行政室長官であった。法務大臣 J. T. J. v. ケネリッツ (Vgl. NDB, Bd. 12, S. 364; Kosch 1963, S. 683) は1828年から枢密内局内務部担当内局大臣代理であり、30年9月4日に枢密顧問官兼本領警察委員長官に任命された。宗教大臣 Ch. G. ミュラー (Vgl. Gretsche 1863, S. 664) は1918年から本領警察委員会宮廷・司法顧問官であり、「九月騒乱」以後に本領警察委員会の部主任となった。以上の4人は、30年9月10日に設置された勅命公安委員会の委員でもあった。大蔵大臣 H. A. v. ツェッジャウ (Vgl. ADB, Bd. 45, S. 105-108) はプロイセンの官吏を経て1829年からドイツ連盟議会のザクセン政府代表、30年11月から枢密顧問官兼上級宗務委員長官、31年3月から枢密財務委員長官であった。外務大臣ミンクヴィッツ (Vgl. Gretsche 1863, S. 437-438, 659; Böttiger 1873, S. 367; Verlohren 1910, S. 367) は1818年からドイツ連盟議会のザクセン陸軍代表、19年からベルリン駐在公使、22年から枢密内局外務部国家書記官補・枢密陸軍顧問官・陸軍少将、26年から外務部主任・枢密顧問官であり、30年9月13日に外務部担当内局大臣に任命された。無任所国家大臣 H. G. v. カルロヴィッツ (Vgl. ADB, Bd. 3, S. 791; NDB, Bd. 3, S. 147; Kosch 1963, S. 198; BWDG 1973, S. 433-434) は1821年からドイツ連盟議会のザクセン政府代表、27年から枢密顧問官であった。Witzleben 1881, S. 136, 146-177; Schmidt 1966, S. 98, 106, 112-119, 122.

[5a] 本訳(Ⅷ)、261ページへの追加。19世紀央の騎士領所有者全体に占める貴族の割合について、次の事実が指摘されている。①1845年のライプツィヒ県(K)の騎士領236(これはGS 1832, S. 432-433によれば、騎士領代表選挙権を持つ騎士領の総数である。)のうち、貴族の所有するものは124, 市民の所有するものは105, 都市の所有するものは7であった。66年には貴族の所有者は108人に減少していた。②1866年に騎士領代表選挙権を持つ、エルツゲビルゲ県(K)の騎士領所有者のうち、貴族は34人にすぎなかった(GS 1832, S. 429-430によれば、選挙権を持つ騎士領は、合計して123あった)…。しかも、この34人の中には、一ないし数世代前に貴族となった市民の子孫が相当含まれていた。以上、Weiß 1993, S. 81. ただし、貴族の騎士領所有者の中には複数騎士領の所有者もいると考えられる。

- [18a] 本訳 (V), 153ページ下から5行目「リープクネヒト」への追加訳注. 彼は1877年9月に第36農村選挙区からザクセン邦議会に選出された. しかし, ザクセン国籍が3年に達しなかった彼は, 政府によって当選を取り消された. Bebel 1911, S.389. なぜなら, 1868年選挙法第4条は3年以上のザクセン国籍を被選挙権の条件のひとつとしていた (Schimmel 1912, S.96.) からである. なお, 79-85年と89-92年に下院議員であった彼は, 67-71年および74-81年にはザクセン選出の北ドイツ連邦議会・ドイツ帝国議会議員でもあった. Osterroth 1960, S.192-195; Schwarz 1965, S.388-389; BWDG 1974, S.1650-1651; Schröder 1986, S.155-156.
- [18b] 本訳 (V), 153ページ下から4行目「フライターク」への追加訳注. ライプツィヒ市の弁護士である彼は, リープネヒトの当選が取り消された (前注 [18a] 参照) 後の同選挙区の再選挙で当選した. Bebel 1911, S.389; Schimmel 1912, S.96. しかし, 83年には立候補しなかった. Schimmel 1912, S.100. 彼は72年のライプツィヒ陪審裁判所の大逆罪訴訟においてベーベルとリープクネヒトの弁護士であった. Bebel 1911, S.248. なお, 上記第36農村選挙区は旧シュトルベルク管区 (GA) であった. SHB 1978, S.41.
- [18c] 本訳 (V), 153ページ下から1行目「ベーベル」への追加訳注. 1881-90年に下院議員であった彼は, 67-81年にはザクセン選出の北ドイツ連邦議会・ドイツ帝国議会議員でもあった. NDB, Bd.1, S.684; Osterroth 1960, S.15-18; Schwarz 1965, S.263; Schröder 1986, S.78-79.
- [19a] 本訳 (V), 155ページ15行目「社会民主党員」への追加訳注. これはフレスドルフのことである. 彼は93年の邦議会における同党の議員, コルディッツ (クリミッチャウの居酒屋店主, 91-94年に下院議員) の提案をふたたび提案したのである. Schimmel 1912, S.102, 104, 107-108.
- [19b] 本訳 (V), 155ページ22行目「(L.O.W.) シュトライト」への追加訳注. 彼は1860年からツヴィッカウ市長, 74-98年に同市の上級市長, 69-98年に下院副議長, 78-81年にはザクセン選出の帝国議会議員 (自由思想党) であった. Schwarz 1963, S.476および1992年6月5日付けツヴィッカウ市立文書館回答.
- [22b] 本訳 (V), 158ページ9行目「ゴルトシュタイン」への追加訳注. 彼は1891-98年と1905-09年に下院議員, 03-09年にザクセン選出の帝国議会議員 (社会民主党) であった. Schröder 1986, S.116. Vgl. Kosch 1963, S.410; Schwarz 1965, S.325.

(第3章)

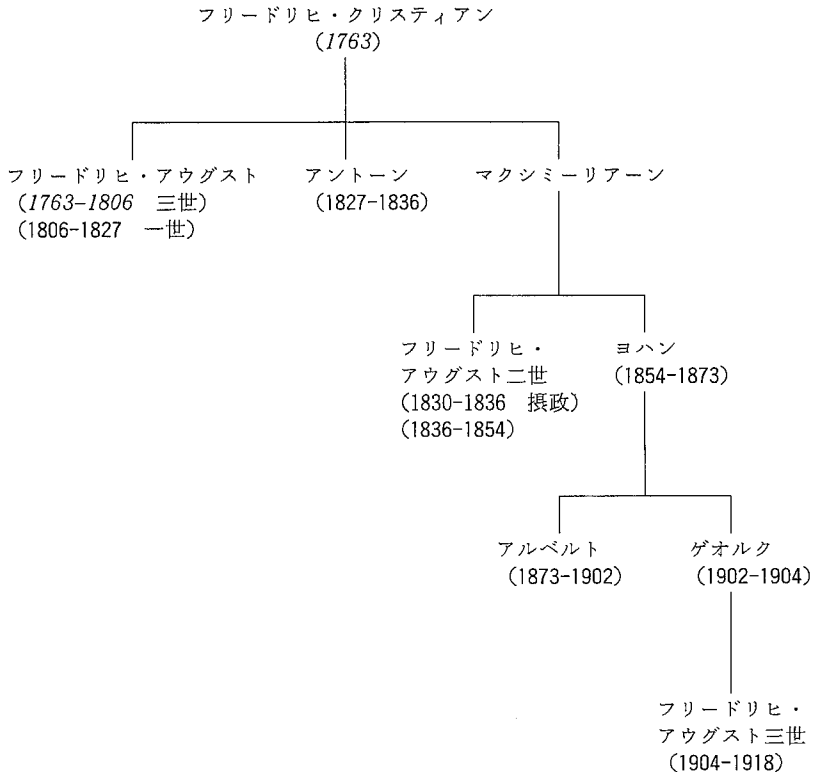
- [8] 本訳 (VI), 194ページへの追加. ライプツィヒ市の著名な書籍商の子として生まれ, 1762-63年の国家再建委員会 (Restaurationskommission) の議長, 63年に枢密顧問官・諮問大臣となったフリッチュについては Vgl. ADB, Bd.8, S.110-113; NDB, Bd.5, S.624-625; Schlechte 1958, S.46-58, 571; Blaschke 1991(b), S.23-26.
- [30a] 本訳 (VI), 181ページ25行目「シーク」への追加訳注. 1912年に大蔵省の財

務参事官, 19年から報告参事官, 23年から邦会計検査院 (Staatsrechnungshof. 上級会計検査室から1922年に改組された官庁— Enke 1955, S. 171) の長官であった彼は, 30年から33年まで首相兼国民教育大臣 (国家人民党) であった. SHB 1912, S. 141; Wer 1935, S. 1382; Klein 1982, S. 117, 122; Fenske 1983, S. 330.

[32] 本訳 (Ⅳ), 196ページへの追加. なお, 県 (KD) の管轄区域 (県域) も Regierungsbezirk と呼ばれた. Vgl. SHB 1857, S. 279-280, usw.

〔ザクセン王家系図 (1806-1918年)〕

典拠: Otto Mayer, *Das Staatsrecht des Königreichs Sachsen*, Tübingen 1909, S. 9, など. 国王在位期間はゴチック数字によって, 選帝侯在位期間はイタリック数字によって示される.



〔大臣歴任表 (1813-1918年)〕

典拠：Karlheinz Blaschke, "Anhang. Minister des Königreichs Sachsen 1815-1918", in: Klaus Schwabe (Hrsg.), *Die Regierungen der Mittel- und Kleinstaaten 1815-1933*, Boppard a. R. 1983, S. 285-294; Thomas Klein, *Sachsen*, Marburg 1982, S. 105-116 (*Grundriß zur deutschen Verwaltungsgeschichte 1815-1945*, Bd. 14.) ; など.

(A) 内局大臣兼国家書記官

- (1) アインジーデル (内務部兼外務部1813-1830) ; (2a) リンデナウ (内務部 1830-1831) ; (2b) ミンクヴィッツ (外務部1830-1831)

(B) 閣僚会議議長 (または首席国家大臣)

- (1) リンデナウ (1831-1843) ; (2) J. T. J. v. ケネリッツ (1843-1848) ; (3) ブラウン (1848-1849) ; (4) G. F. ヘルト (1849) ; (5) チンスキー (1849-1858) ; (6) ボイスト (1858-1866) ; (7) ファルケンシュタイン (1866-1871) ; (8) フリーゼン (1871-1876) ; (9) ファブリス (1876-1891) ; (10) ゲルバー (1891) ; (11) テュメル (1891-1895) ; (12) シューリヒ (1895-1901) ; (13) メツチュ＝ライヒェンバッハ (1901-1906) ; (14) リューガー (1906-1910) ; (15) オットー (1910-1912) ; (16) ハウゼン (1912-1914) ; (17) H. (v.) ベック (1914-1918) ; (18) Rud. ハイנטツェ (1918)

(C) 法務大臣

- (1) J. T. J. v. ケネリッツ (1831-1846) ; (2) Alb. v. カルロヴィッツ (1846-1848) ; (3) ブラウン (1848-1849) ; (4) G. F. ヘルト (1849) ; (5) チンスキー (1849-1858) ; (6) ベーア (1858-1866) ; (7) シュナイダー (1866-1871) ; (8) アーベケン (1871-1890) ; (9) シューリヒ (1890-1901) ; (10) リューガー (1901-1902) ; (11) オットー (1902-1912) ; (12) ナーゲル (1912-1918) ; (13) Rud. ハイנטツェ (1918)

(D) 大蔵大臣

- (1) H. A. v. ツェッジャウ (1831-1848) ; (2) ゲオルギー (1848-1849) ; (3) エーレンシュタイン (1849) ; (4) ベーア (1849-1858) ; (5) フリーゼン (1858-1876) ; (6) L. R. v. ケネリッツ (1876-1890) ; (7) テュメル (1890-1895) ; (8) W. v. ヴァッツドルフ (1895-1902) ; (9) リューガー (1902-1910) ; (10) E. v. ザイデヴィッツ (1910-1918) ; (11) M. O. シュレーダー (1918)

(E) 内務大臣

- (1) リンデナウ (1831-1834) ; (2) H. G. v. カルロヴィッツ (1834-1836) ; (3) ノスティッツ・ウント・イエンケンドルフ (1836-1844) ; (4)

ファルケンシュタイン (1844-1848) ; (5) オーバーレンダー (1848-1849) ;
 (6) ヴァインリヒ (1849) ; (7) フリーゼン (1849-1852) ; (8) ボイスト
 (1852-1866) ; (9) H. v. ノスティッツ=ヴァルヴィッツ (1866-1891) ;
 (10) メッチュ=ライヒェンバッハ (1891-1906) ; (11) ホーエンター
 (1906-1909) ; (12) フィッツトゥーム (1909-1918) ; (13) コッホ (1918)

(F) 宗教大臣

(1) Chr. G. ミュラー (1831-1836) ; (2) H. G. v. カルロヴィッツ (1836-
 1840) ; (3) ヴォーターズハイム (1840-1848) ; (4) プフォルテン (1848-
 1849) ; (5) G. F. ヘルト (1849) ; (6) ボイスト (1849-1852) ; (7) ファ
 ルケンシュタイン (1853-1871) ; (8) ゲルバー (1871-1891) ; (9) P. v. ザ
 イデヴィッツ (1892-1906) ; (10) シュリーベン (1906-1907) ; (11) H. (v.)
 ベック (1908-1918) ; (12) A. v. ノスティッツ=ヴァルヴィッツ (1918)

(G) 陸軍大臣

(1) ツェッチェヴィッツ (1831-1839) ; (2) G. v. ノスティッツ=ヴァル
 ヴィッツ (1839-1846) ; (3) オッペル (1846-1848) ; (4) ホルツェンドルフ
 (1848) ; (5) オッペル (1848) ; (6) トロイシュ・フォン・ブットラル
 (1848-1849) ; (7) ラーベンホルスト (1849-1866) ; (8) ファブリス
 (1866-1891) ; (9) プラーニッツ (1891-1902) ; (10) ハウゼン (1902-
 1914) ; (11) Ad. v. カルロヴィッツ (1914-1915) ; (12) ヴィルスドルフ
 (1915-1918)

(H) 外務大臣

(1) ミンクヴィッツ (1831-1835) ; (2) H. A. v. ツェッシャウ (1835-
 1848) ; (3) プフォルテン (1848-1849) ; (4) ボイスト (1849-1866) ;
 (5) フリーゼン (1866-1876) ; (6) H. v. ノスティッツ=ヴァルヴィッツ
 (1876-1882) ; (7) ファブリス (1882-1891) ; (8) メッチュ=ライヒェン
 バッハ (1891-1906) ; (9) ホーエンター (1906-1909) ; (10) フィッツ
 トゥーム (1909-1918) ; (11) Rud. ハイנטツェ (1918)

(I) 無任所国家大臣

(1) H. G. v. カルロヴィッツ (1831-1834) ; (2) リンデナウ (1836-
 1843) ; (3) J. T. J. v. ケネリッツ (1846-1848) ; (4a) M. ヘルト (1918) ;
 (4b) フレースドルフ (1918) ; (4c) ギュンター (1918) ; (4d) ニツチュケ
 (1918)

(J) 補遺. 宮内大臣

(1) J. T. J. v. ケネリッツ (1831-1833) ; (2) ミンクヴィッツ (1833-
 1835) ; (3) K. v. ヴァッツドルフ (1835-1840) ; (4) H. A. v. ツェッシャウ
 (1851-1869) ; (5) H. v. ノスティッツ=ヴァルヴィッツ (1869-1871) ;
 (6) ファルケンシュタイン (1871-1882) ; (7) H. v. ノスティッツ=ヴァル
 ヴィッツ (1882-1895) ; (8) P. v. ザイデヴィッツ (1895-1906) ; (9) メッ
 チュ=ライヒェンバッハ (1906-1918)

〔人名索引 (Personenregister)〕

- Das vom Übersetzer zusammengestellte Register umfaßt alle Personen, die in dem Text, den Anmerkungen des Verfassers und denen des Übersetzers angeführt wurden. Fettgedruckte Zahl gibt die Seite an, die die vom Übersetzer zusammengefaßten Daten zu der betreffenden Person enthält. Die Vornamen und die Lebensdaten, bei welchen das Zeichen ! "in 1992 tätig" bedeutet, beruhen, soweit vom Verfasser nicht gesondert verzeichnet, auf den folgenden Publikationen:
- Allgemeine Deutsche Biographie*, 56 Bde., Leipzig 1875–1912,
- Aßmann, Karl u. a. (Hrsg.), *Sächsische Landesbibliothek Dresden 1556–1956*, Leipzig 1956,
- Blaschke, Karlheinz, "Anhang. Minister des Königreichs Sachsen", in: Klaus Schwabe (Hrsg.), *Die Regierungen der deutschen Mittel- und Kleinstaaten 1815–1933*, Boppard a. R. 1983,
- Czok, Karl (Hrsg.), *Geschichte Sachsens*, Weimar 1989,
- Fenske, Hans, "Anhang. Minister der Freistaaten Sachsen und Thüringen 1918–1933", in: Schwabe (Hrsg.), a. a. O.,
- Klein, Thomas, *Sachsen*, Marburg 1982 (*Grundriß zur deutschen Verwaltungsgeschichte*, Bd. 14),
- Kötzschke, Rudolf/Kretzschmar, Hellmut, *Sächsische Geschichte*, 2. Aufl., Frankfurt a. M. 1965,
- Kretzschmar, Hellmut/Schlechte, Horst(Hrsg.), *Französische und sächsische Gesandtschaftsberichte aus Dresden und Paris 1848–1849*, Berlin 1956,
- Kürschners Deutscher Gelehrten Kalender*, 1(1925), 2(1926), 3(1928/29), 4(1931), 5(1935), 6(1940/41), 7(1950), 8(1954), 9(1961), 10(1966), 11(1970), 12(1976), 13(1980), 14(1983), 15(1987), 16(1992),
- Kürschners Deutscher Literatur-Kalender. Nekrolog 1936–1970*, Berlin/New York 1973,
- The National Union Catalog Pre-1956 Imprints*, 754 Vols., London/Chicago 1968–1974,
- Neue Deutsche Biographie*, Bd. 1 ff., Berlin 1953 ff.,
- Ruß, Ralph (Hrsg.), *Afrinisches Ecce*, Bd. 16 (1911), 17 (1912), 19 (1914), Dresden,
- Sächsische Bibliographie*, Dresden 1962 ff.,
- Sächsische Heimatblätter*, Bd. 35, Dresden 1989,
- Sächsische Lebensbilder*, hrsg. von der Sächsischen Kommission für Geschichte, 3 Bde., Dresden 1930, 1938, 1941,
- Schiffner, C[arl], *Aus dem Leben alter Freiburger Bergstudenten*, Bd. 1, Freiberg 1935,

Schlechte, Horst (Hrsg.), *Staatsreform in Kursachsen 1762/63*, Berlin 1958,
 Schmidt., Gerhard, *Die Staatsreform in Sachsen in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts*, Weimar 1966,
 Schröder, Wilhelm Heinz, *Sozialdemokratische Reichstagsabgeordnete und Reichstagskandidaten 1898–1918*, Düsseldorf 1986.
Staatshandbuch für das Königreich Sachsen,
 Verlohren, Heinrich August, *Stammregister und Chronik der Kur- und Königlich Sächsischen Armee von 1670 bis zum Beginn des 20. Jahrhunderts*, Leipzig 1910,
Zeitschrift des Sächsischen Statistischen Landesamtes, Bd. 78/79, 1932/33, und den "Lebensläufen" in manchen Dissertationen.

Um das Register weiter zu vollständigen, plante der Übersetzer, nach Deutschland zu fahren, aber es war ihm wegen seines Gesundheitszustandes leider nicht möglich. So verfaßte er etwa 300 briefliche Anfragen, von denen manche gar nicht oder ohne Ergebnis beantwortet wurden. Wertvoll waren die sehr warmherzigen Antworten der folgenden Damen und Herren Historiker:

Dr. Richard Dietrich, Kassel, mit seiner Enkelin, Fräulein Carola Dietrich, Augsburg,
 Dr. Günter Kolbe, Glienicke, mit seinem Sohn, Herrn Wielud Kolbe, Glienicke,
 Dr. Helga-Maria Kühn, Göttingen,
 Dr. Erhard Mäding, Köln,
 Dr. Volker Ruhland, Dresden,
 Dr. Harald Schieckel, Oldenburg,
 Dr. Gerhard Schmidt, Dresden, und
 Dr. Rolf Weber, Leipzig.

Ebenfalls wertvoll waren die sehr freundlichen Mitteilungen der folgenden Institutionen:

Sorbisches Kulturarchiv, Institut für sorbische Volksforschung, Bautzen,
 Berliner Stadtbibliothek, Berlin,
 Bibliothek der Akademie der Wissenschaften, Berlin,
 Humboldt-Universität, Universitätsarchiv, Berlin,
 Staatsbibliothek zu Berlin,
 Deutscher Landkreistag, Bonn,
 Friedrich-Ebert-Stiftung, Bibliothek, Bonn,
 Stadtarchiv Chemnitz,
 Technische Universität, Universitätsarchiv, Chemnitz,
 Gesellschaft Deutscher Metallhütten-und Bergleute, Clausthal-Zellerfeld,
 Pädagogische Hochschule, Rektorat, Dresden,

Sächsische Landesbibliothek, Dresden,
 Sächsisches Hauptstaatsarchiv Dresden,
 Stadtarchiv Dresden,
 Stadtmuseum Dresden,
 Technische Universität, Universitätsarchiv, Dresden,
 Verkehrsmuseum Dresden,
 Universitätsbibliothek Erlangen,
 Deutsche Bibliothek, Frankfurt a. M.,
 Bergakademie, Bibliothek "Georgius Agricola", Freiberg,
 Universitätsbibliothek Göttingen,
 Universitätsbibliothek Halle,
 Universitätsbibliothek Jena,
 Stadtarchiv Kirchberg,
 Zentralarchiv für Empirische Sozialforschung, Köln,
 Deutsche Bücherei, Leipzig,
 Deutsche Zentralstelle für Genealogie, Leipzig,
 Handelshochschule, Archiv, Leipzig,
 Stadtgeschichtliches Museum, Leipzig,
 Universität, Universitätsarchiv, Leipzig,
 Institut für Europäische Geschichte, Mainz,
 Bayerische Staatsbibliothek, München,
 Institut für Publizistik, Münster,
 Universitätsbibliothek Münster,
 Niedersächsisches Staatsarchiv Oldenburg,
 Stadtarchiv Plauen,
 Bundesarchiv, Abteilungen Potsdam,
 Technische Universität Dresden, Abteilung Forstwirtschaft, Bibliothek, Tharandt,
 Universitätsbibliothek Tübingen,
 Stadtarchiv Zittau und
 Stadtarchiv Zwickau.

Ihnen allen dankt der Übersetzer herzlich. Leider konnte er die vollständigen
 Vornamen eines Schriftstellers, die Geburtsjahre von 3 und die Sterbejahre von
 etwa 30 Personen nicht klären, so daß er Mitteilungen der Leser hierüber erwartet.

Abeken, Christian Wilhelm Ludwig von
 (アーベケン) [1826-1896] (Ⅲ)
 101, 103; (K) 123, 132

Albert (アルベルト, ザクセン国王)
 [1828-1902 (König von Sachsen
 1873-1902)] (Ⅲ) 102-103, 107-

- 108, 120-121; (N) 185; (K) 123, 131
- Anton (アントーン, ザクセン国王) [1755-1836 (König von Sachsen 1827-1836)] (II) 149; (K) 131
- Aßmann, Karl (アスマン) [1890-1970] (K) 134
- August der Starke (アウグスト強健公) →フリードリヒ・アウグスト一世, ザクセン選帝侯
- Bach, Karl Friedrich Hermann (バッハ) [1851-?] (III) 113
- Bakunin, Michael (バクーニン) [1814-1876] (II) 158; (K) 121
- Bartel, Horst (バルテル) [1928-1984] (I) 215; (V) 140
- Bassermann, Ernst (バッサーマン) [1854-1917] (V) 161
- Bebel, August (ベーベル) [1840-1913] (III) 103, 120; (V) 153-155, 161; (VI) 178; (K) 123-124, 130
- Beck (ベック) →H. (v.)ベック
- Beck, Friedrich (Fr. ベック) [1927-!] (I) 186; (VI) 168
- Beck, Heinrich Gustav (seit 1918: von) (H. (v.)ベック) [1854-1933] (III) 112-115, 117, 121; (V) 162; (VIII) 260; (K) 125, 126, 132-133
- Behr, Johann Heinrich August (seit 1859: von) (ベーア) [1793-1871] (II) 158, 162-164, 166, 168; (K) 121, 132
- Behrendts, Wilhelm (ベーレンツ) [1889-?] (V) 140, 165
- Beust, Friedrich Ferdinand Freiherr (seit 1868: Graf) von (ボイスト) [1809-1886] (I) 214; (II) 155-169; (III) 95-96, 119; (N) 183; (V) 146-148, 150-151; (VIII) 253-254; (K) 118, 120, 121, 132-133
- Biedermann, Karl (ビーダーマン) [1812-1901] (II) 152; (K) 118
- Bismarck, Otto (seit 1865: Graf, seit 1871: Fürst) von (ビスマルク) [1815-1898] (III) 96-97, 99
- Blaschke, Karlheinz (ブラッシュケ) [1927-!] (I) 183-184, 188, 195-197, 216; (N) 167-173, 175, 177-181, 183-185; (V) 143, 166-170; (VI) 167, 192, 194-197; (VII) 248-252; (VIII) 249, 251-256, 260, 264; (K) 114-117, 120, 122, 124-125, 127, 129-130, 132, 134
- Bloß, Adolf (ブロース) [1876-1949] (III) 119
- Blum, Robert (ブルーム) [1807-1848] (II) 153; (V) 146, 167
- Bötticher, Walter von (ベッティチャー) [1853-1945] (VI) 176
- Böttiger, Carl Wilhelm (ベッティガー) [1790-1862] (K) 117, 129
- Born, Stephan (ボルン) [1824-1898] (I) 201; (K) 115
- Bornhak, Konrad (ボルンハク) [1861-1944] (VI) 168
- Bosl, Karl (ボーズル) [1908-1993] (K) 115
- Brabant, Artur (ブラバント) [1870-1936] (III) 122
- Bräuer, Karl (K. ブロイアー) [1881-1965] (II) 169
- Brather, Hans-Stephan (ブラーター) [1928-!] (VI) 192
- Braun, Alexander Karl Hermann (ブラウン) [1807-1868] (II) 153, 155; (K) 118-119, 132
- Bredow, Claus von (ブレードー) [1850(?) -1913(?)] (N) 178-180;

- (K) 123-126
 Breuer, Friedrich Ludwig (F.L. ブロイアー) [1786-1833] (II) 149; (K) 116-117
 Bruck, Karl Ludwig (seit 1849: Freiherr von) (ブルック) [1798-1860] (II) 161
 Brühl, Heinrich Graf (seit 1737: Reichsgraf von (ブリュール) [1700-1763] (II) 169; (N) 166; (V) 194; (VII) 246-247; (K) 122
 Brunner, Georg (ブルナー) [1936-!] (VII) 252
 Bülow, Friedrich (ビューラウ) [1805-1859] (VII) 252
 Bülow, Bernhard (seit 1899: Graf, seit 1905: Fürst) von (ビューロー) [1849-1929] (III) 121
 Burgk, Herren von (ブルク家) (V) 192
 Buttlar (ブットラル) → トロイシュ・フォン・ブットラル
 Carlowitz (カルロヴィッツ) → Alb. v. カルロヴィッツ
 Carlowitz (カルロヴィッツ) → H.G. v. カルロヴィッツ
 Carlowitz, Adolf von (Ad. v. カルロヴィッツ) [1858-1928] (N) 185; (K) 126, 133
 Carlowitz, Albert von (Alb. v. カルロヴィッツ) [1802-1874] (II) 152-153, 157; (K) 118, 132
 Carlowitz, Hans Georg von (H.G. v. カルロヴィッツ) [1772-1840] (II) 148-149, 151; (N) 180; (V) 166; (K) 118, 129, 132-133
 Carola (カローラ) → Karoline von Wasa (カロリーネ・フォン・ヴァザ)
 Colditz, August Friedrich (コルディッツ) [1834-1911] (K) 130
 Crell, Nikolaus (クレル) [1557-1601] (VIII) 252; (K) 116
 Czok, Karl (チョク) [1926-!] (N) 183; (VII) 249; (VIII) 250, 254, 256; (K) 124-125, 134
 Dante Alighieri (ダンテ) [1265-1321] (II) 163; (K) 117
 Dickmann, Fritz (ディックマン) [1906-1969] (III) 119
 Diersch, Victor Camillo (ディールシュ) [1892-?] (V) 143, 165-170; (VIII) 254, 256, 261-262
 Dietrich, Richard (ディートリヒ) [1909-1993] (III) 119; (V) 167; (K) 135
 Diller, Eduard William (ディラー) [1840-1914] (III) 106-107; (K) 122
 Dittrich, Max (ディットリヒ) [1844-1913] (III) 122
 Donat, Christian Gottlob (ドナート) [1751-1810] (N) 167; (V) 176; (VI) 247
 Dürichen, Johannes (デューリヒェン) [1904-?] (N) 166, 168
 Ehrenstein, Karl Wolf von (エーレンシュタイン) [1805-1865] (II) 155-156; (N) 183; (K) 119, 132
 Einsiedel, Detlev Graf von (アインジードル) [1773-1861] (I) 202, 206; (N) 166-167; (VII) 247-248; (VIII) 249; (K) 115, 132
 Elsner, Georg (エルスナー) [1887-?] (V) 197
 Engel, Karl August Maximilian von (エンゲル) [1795-1881] (II) 166; (K) 122
 Engelberg, Ernst (エンゲルベルク) [1909-!] (I) 215; (N) 184; (VIII) 254
 Enke, Eva (エンケ) [1907-!] (N)

- 181; (K) 131
- Fabrice, Georg Friedrich Alfred (seit 1884: Graf von (ファブリス))[1818-1891] (I) 214; (III) 96, 101-103, 120; (N) 184; (K) 122, 132-133
- Falkenstein, Johann Paul Freiherr von (ファルケンシュタイン)[1801-1882] (II) 152-153, 160, 162-163, 166; (III) 96; (V) 144; (K) 118, 132-133
- Fellisch, Alfred (フェリッシュ) [1884-1973] (VII) 249
- Fenske, Hans (フンスケ) [1936-!] (N) 185; (K) 126-128, 131, 134
- Finsterbusch, Kurt (フィンスターブッシュ) [1911-] (V) 155
- Fischer, Otto (O. フィッシャー) [1846-1915] (N) 172-173, 175-179, 181; (V) 166-167, 169; (W) 197; (VII) 251
- Fischer, Wolfram (W. フィッシャー) [1928-!] (N) 183
- Flathe, Theodor (フラテ) [1827-1900] (K) 117
- Fleißner, Hermann (フライスナー)[1865-1939] (III) 117; (V) 162; (K) 127
- Forberger, Rudolf (フォアベルガー) [1910-!] (K) 114
- Fräßdorf, Julius (フレースドルフ)[1857-1932] (III) 117; (K) 127, 130, 133
- Francke, F. A. (フランケ) [?-?] (III) 122; (N) 178
- Freytag, Otto (フライターク) [1835-1917] (V) 153; (K) 130
- Fricke, Dieter (フリッケ) [1927-!] (V) 168-169; (K) 124, 126, 128
- Friedrich August (フリードリヒ・アウグスト) →フリードリヒ・アウグスト二世, ザクセン国王
- Friedrich August (フリードリヒ・アウグスト) →フリードリヒ・アウグスト三世, ザクセン国王
- Friedrich August I. (フリードリヒ・アウグスト一世, ザクセン選帝侯) [1673-1733 (Kurfürst von Sachsen 1694-1733; König August II. von Polen 1697-1733)] (N) 166
- Friedrich August I. (フリードリヒ・アウグスト一世, ザクセン国王) [1750-1827] (König von Sachsen 1806-1827)] (I) 203; (N) 167; (K) 131
- Friedrich August II. (フリードリヒ・アウグスト二世, ザクセン国王) [1797-1854 (König von Sachsen 1836-1854)] (II) 149, 151-152, 155, 163; (K) 117, 131
- Friedrich August III. (フリードリヒ・アウグスト三世, ザクセン選帝侯) [Kurfürst von Sachsen (1763-1806)] →フリードリヒ・アウグスト一世, ザクセン国王
- Friedrich August III. (フリードリヒ・アウグスト三世, ザクセン国王) [1865-1932 (König von Sachsen 1904-1918)] (III) 108-110, 118, 121; (N) 185; (V) 160; (K) 125, 131
- Friedrich Christian (フリードリヒ・クリスティアン, ザクセン選帝侯) [1722-1763 (Kurfürst von Sachsen 1763)] (K) 131
- Friesen, Richard Freiherr von (フリーゼン) [1808-1884] (I) 214; (II) 158, 160, 162-164, 166-168; (III)

- 96-98, 100-102, 106, 119; (N)
183; (V) 148-149, 151; (K) 121,
132-133
- Fritzsch, Thomas (seit 1742: Freiherr)
(seit 1730: von) (フリッツュ)
[1700-1775] (V) 194; (K) 130
- Gartenberg, Peter Nikolaus Freiherr von
(ガルテンベルク) [1714-1786] (I)
186
- Georg (ゲオルク, ザクセン国王) [1832-
1904, König von Sachsen 1902-1904]
(III) 108, 120-121; (N) 185;
(K) 124, 131
- Georgi, Robert (ゲオルギー) [1802-1869]
(II) 153; (K) 119, 132
- Gerber, Carl Friedrich Wilhelm (seit
1878: von) (ゲルバー) [1823-1891]
(III) 99-100, 103; (N) 162; (K)
122, 132-133
- Geyer, Curt (ガイアー) [1891-1967] (VIII)
253
- Goethe, Johann Wolfgang (seit 1782: von)
(ゲーテ) [1749-1832] (II) 149;
(III) 107
- Göpner, Johannes (ゲーブナー) [1889-?] (V)
144, 165
- Goldstein, Hermann (ゴルトシュタイン)
[1852-1909] (V) 158; (K) 130
- Gretschel, Carl (グレッツェル) [1803-
1848] (VIII) 252; (K) 117, 129
- Groebe, Klaus von der (グレーベン)
[1901-!] (VII) 252-253
- Groß, Reiner (グロース) [1937-!] (I)
187-188, 215-216; (N) 173, 177,
182-183; (V) 138-139; (VI)
167; (VIII) 249, 251, 255, 260
- Großmann, Karl (グロースマン) [1876-
1945] (III) 119
- Gruner, Karl Gustav Adolf (グルーナー)
[1778-1831] (II) 149-150; (N)
182; (VIII) 252; (K) 116
- Günther, Oskar (ギュンター) [1861-1945]
(III) 117; (N) 185; (K) 127,
133
- Hahlweg, Werner (ハールヴェーク)
[1912-1989] (N) 167, 178
- Hammer, Michael (ハマー) [1956-!] (VIII) 249
- Hardenberg, Karl August Freiherr (seit
1814: Fürst) von (ハルデンベルク)
[1750-1822] (I) 205
- Hartstock, Erhard (ハルトシュトック)
[1939-!] (VI) 193
- Haupt, Moritz (ハウプト) [1808-1874]
(II) 160; (V) 148; (K) 121
- Hausen, Max Clemens Lothar Freiherr von
(ハウゼン) [1846-1922] (III) 115-
116, 122; (K) 126, 132-133
- Heide, Hans-Jürgen von der (ハイデ)
[1927-!] (VII) 252
- Heilmann, Ernst (ハイルマン) [1881-
1940] (VIII) 260
- Heink, Georg (ハインク) [1859-1933]
(III) 110; (V) 160; (K) 125
- Heinrich I. (ハインリヒ一世, ドイツ国
王) [um 875-936 (Deutscher König)]
(III) 121
- Heinze (ハインツェ) → Rud. ハインツェ
- Heinze, Rudolf (Rud. ハインツェ) [1865-
1928] (III) 117-118, 122; (V)
162; (VII) 249; (K) 126, 132-133
- Heinze, Rupprecht (Rup. ハインツェ)
[1907-1985] (III) 122; (K) 126
- Held, Gustav Friedrich (G.F. ヘルト)
[1804-1857] (I) 214; (II) 155-
156; (N) 183; (V) 146; (K)
119, 120, 132-133
- Heldt, Max (M. ヘルト) [1872-1933] (III)

- 117; (N) 185; (K) 127, 133
 Herrmann, Ursula (ヘルマン) [1932-!] (III) 121; (V) 159
 Heß, Ulrich (ヘス) [1921-1984] (III) 120; (N) 165; (VI) 192; (VII) 251
 Heubner, Otto Leonhard (ホイブナー) [1812-1893] (II) 158; (V) 148; (K) 121
 Heynitz, Friedrich Anton von (ハイニッツ) [1729-1802] (V) 165; (K) 128
 Hitler, Adolf (ヒトラー) [1889-1945] (V) 182
 Hoffmann, Alexander (A. ホフマン) [1879-1946] (N) 172, 184
 Hoffmann, Georg (G. ホフマン) [1886-?] (VII) 253; (VIII) 264
 Hofmann, Hugo (H. ホーフマン) [1886-1976] (V) 143
 Hofmann, Wolfgang (W. ホーフマン) [1932-] (K) 128
 Hohenthal (ホーエンタール) →ホーエンタール・ウント・ベルゲン
 Hohenthal und Bergen, Karl Adolf Philipp Wilhelm Graf von (ホーエンタール・ウント・ベルゲン) [1853-1909] (I) 214; (III) 110-112, 121; (V) 159-160, 163; (K) 125, 133
 Holldack, Heinz Georg (ホルダック) [1905-?] (II) 168; (V) 149; (VIII) 253-254
 Holtzendorff, Albrecht Ernst Stellanus Graf von (ホルツェンドルフ) [1792-1882] (N) 182; (K) 133
 Huber, Ernst Rudolf (フーバー) [1903-1990] (II) 166, 168; (III) 120, 122; (V) 143, 151, 158
 Huffmann, Fritz Robert (フフマン) [1906-?] (VII) 249
 Illge, Richard (イルゲ) [1859-?] (V) 155, 159
 Jäger, Karl (イエーガー) [1886-1971] (N) 181
 Jahn, Otto (ヤーン) [1813-1869] (II) 160; (V) 148; (K) 121
 Jeserich, Kurt Gustav Adolf (イエーゼリヒ) [1904-!] (I) 183; (N) 167; (K) 115
 Johann (ヨハン, ザクセン国王) [1801-1873, König von Sachsen 1854-1873] (II) 149, 155, 163, 165-168; (III) 102-103, 108, 120; (N) 183; (V) 148; (K) 117, 131
 Karl IV. (カルル四世, ドイツ国王) [1316-1387 (Deutscher König)] (I) 187
 Karoline von Wasa (カロリーネ・フォン・ヴァザ) [1833-1907] (III) 120; (N) 185
 Kessler, Hary Graf von (ケスラー) [1868-1937] (III) 120
 Kiesewetter, Hubert (キーゼヴェッター) [1939-!] (N) 173, 183; (VIII) 249, 251, 255; (K) 114, 116
 Kirsch, Günther (キルシュ) [1935-!] (VII) 248
 Klein, Thomas (クライン) [1933-!] (I) 184, 197-198; (N) 167-169, 171, 175, 177, 179, 181-185; (VI) 194-196; (VII) 249; (VIII) 260, 264; (K) 115, 117-128, 131-132, 134
 小林昇 (Kobayashi, Noboru) [1916-!] (N) 182
 Kobuch, Agatha (A. コーブフ) [1933-!] (V) 192
 Kobuch, Manfred (M. コーブフ) [1935-!] (I) 187, 216; (V) 138

- Koch, Walter Franz (コッホ) [1870-?] (Ⅲ) 109, 117-118, 121-123; (Ⅳ) 160, 165; (Ⅴ) 163; (Ⅵ) 126, 133
 Könnertitz (ケネリッツ) → J.T.J.v.ケネリッツ
 Könnertitz (ケネリッツ) → L.R.v.ケネリッツ
 Könnertitz, Julius Traugott Jakob von (J.T.J.v.ケネリッツ) [1792-1866] (Ⅱ) 148-152, 163; (Ⅴ) 166; (Ⅵ) 117, 123, 129, 132-133
 Könnertitz, Leonce Robert (seit 1874: Freiherr) von (L.R.v.ケネリッツ) [1835-1890] (Ⅲ) 101, 103, 106; (Ⅵ) 123, 132
 Kötzschke, Rudolf (ケツチュケ) [1867-1949] (Ⅰ) 215; (Ⅱ) 168; (Ⅲ) 120; (Ⅳ) 174, 183; (Ⅴ) 168; (Ⅵ) 250, 254; (Ⅶ) 134
 Kolbe, Günter (コルベ) [1933-1984] (Ⅵ) 120, 135
 Kosch, Wilhelm (コッシュ) [1879-1960] (Ⅳ) 185; (Ⅵ) 115, 117-130
 Krebs, Ernst (クレープス) [1877-1970] (Ⅲ) 122
 Krell (クレル) → Crell (クレル)
 Kretzschmar, Hellmut (クレツチュマル) [1893-1965] (Ⅰ) 186, 215; (Ⅱ) 167-168; (Ⅲ) 120; (Ⅳ) 172-176, 178, 181-183; (Ⅴ) 148, 154, 168; (Ⅵ) 250-251; (Ⅶ) 250, 254; (Ⅷ) 115, 117-121, 134
 Kühn, Helga-Maria (H.キューン) [1933-!] (Ⅴ) 167; (Ⅵ) 135
 Kühn, Rudolf (R.キューン) [1886-?] (Ⅳ) 176
 Külz, Wilhelm (キュルツ) [1875-1948] (Ⅳ) 165; (Ⅵ) 128
 Kunz, Andreas (クンツ) [1949-!] (Ⅳ) 183
 Laband, Paul (ラーバント) [1838-1918] (Ⅰ) 198
 Langsdorff, Karl von (ランクスドルフ) [1834-1912] (Ⅶ) 260
 Laske, Claus (ラスケ) [1933-!] (Ⅴ) 167
 Lau, Franz (ラウ) [1907-1973] (Ⅰ) 187
 Lehmann, Rudolf (レーマン) [1891-1984] (Ⅰ) 186
 Leuthold, Carl Edwin (ロイトホルト) [1849-1891] (Ⅳ) 173, 175-177; (Ⅴ) 196
 Liebknecht, Wilhelm (リープクネヒト) [1826-1900] (Ⅴ) 153; (Ⅵ) 123, 130
 Lindenau, Bernhard August von (リンデナウ) [1779-1854] (Ⅰ) 187, 195, 203, 205-206; (Ⅱ) 148-151, 163, 165, 167; (Ⅲ) 97, 111; (Ⅳ) 162, 166; (Ⅴ) 143, 166; (Ⅵ) 249; (Ⅶ) 129, 132-133
 Lipinski, Richard (リピンスキー) [1867-1936] (Ⅲ) 118; (Ⅵ) 127
 List, Friedrich (リスト) [1879-1846] (Ⅳ) 182
 Löbner, Arthur (レーブナー) [1851-1940] (?) (Ⅳ) 176
 Löschburg, Winfried (レッシュブルク) [1932-!] (Ⅱ) 168; (Ⅴ) 149; (Ⅵ) 254
 Löser, Herren von (レーザー家) (Ⅴ) 165
 Lommatzsch, Georg (ロマツチュ) [1862-1932] (Ⅴ) 191
 Luise von Toskana (ルイーゼ・フォン・トスカナ) [1870-1947] (Ⅲ) 120-121; (Ⅳ) 185
 Mäding, Erhard (メーディンク) [1909

- !] (Ⅷ) 128, 135
 Marx, Karl (マルクス) [1818-1883] (I) 188
 松田智雄 (Matsuda, Tomoo) [1911-!] (N) 182
 松尾展成 (Matsuo, Nobushige) [1935-!] (N) 172-173, 177, 181, 183; (V) 166, 170; (Ⅵ) 194-195; (Ⅶ) 250; (Ⅷ) 253; (K) 120-121
 Maximilian (マクシミリアーン, ザクセン公子) [1759-1838 (Prinz von Sachsen)] (K) 131
 Mayer, Otto (O. マイアー) [1846-1924] (I) 198; (N) 167, 171, 173, 182, 185; (V) 165-169; (Ⅵ) 196; (Ⅷ) 250, 252; (K) 131
 Mehnert, Paul (メーナート) [1852-1922] (Ⅲ) 105, 120; (V) 155, 157-158; (K) 124
 Mehring, Franz (メーリング) [1849-1919] (Ⅱ) 152, 167
 Meinert, Günther (マイナート) [1912-1988] (N) 172, 181; (K) 122
 Merbach, Johann Daniel (J. D. メールバッハ) [1777-1861] (Ⅱ) 167
 Merbach, Paul Alfred (P. A. メールバッハ) [1880-1951] (Ⅱ) 167
 Metsk, Frido (メーチュク) [1916-1990] (Ⅵ) 193
 Metzsch (メツチュ) → メツチュ・ライヒェンバッハ
 Metzsch-Reichenbach, Karl Georg Levin (seit 1916: Graf) von (メツチュ=ライヒェンバッハ) [1836-1927] (I) 214; (Ⅲ) 104-107, 109-111, 115, 120; (V) 156-157, 159; (K) 124, 132-133
 Meyer, Rudolf (R. マイアー) [1886-?] (V) 140
 Minckwitz, Johannes von (ミンクヴィッツ) [1787-1857] (N) 166; (V) 166; (K) 129, 132-133
 Miquel, Johannes (seit 1897: von) (ミケル) [1828-1901] (Ⅲ) 101
 望田幸男 (Mochida, Yukio) [1931-!] (K) 121
 Mommsen, Theodor (モムゼン) [1817-1903] (Ⅱ) 160; (V) 148; (K) 121
 諸田實 (Morota, Minoru) [1928-!] (K) 116
 Müller (ミュラー) → Chr. G. Müller
 Müller, Christian Gottlieb (Ch. G. ミュラー) [1776-1836] (Ⅱ) 150; (V) 166; (K) 117, 129, 133
 Müller, Hermann (H. ミュラー) [1823-1907] (N) 171-172; (Ⅷ) 255
 Nagel, Paul Arthur (ナーゲル) [1856-1918] (Ⅲ) 114, 117; (K) 125, 132
 Nahm, Peter-Paul (ナーム) [1901-1981] (Ⅵ) 192
 Napoleon Ⅲ. (ナポレオン三世) [1808-1873] (Ⅱ) 162
 Naundorff, Ewald (ナウンドルフ) [1857-?] (N) 171-173, 175-177, 179, 182, 185; (V) 166-169; (Ⅵ) 197; (Ⅶ) 251; (Ⅷ) 261
 Nero (ネロ) [37-68] (Ⅲ) 102
 Neuhaus, Helmut (ノイハウス) [1944-!] (K) 115
 Nitzsche, Emil (ニツチェ) [1869-1931] (V) 159
 Nitzschke, Emil (ニツチュケ) [1870-1921] (Ⅲ) 117; (K) 127, 133
 Nostitz (ノスティッツ) → A. v. ノスティッツ・ヴァルヴィッツ
 Nostitz, Hans von (H. v. ノスティッツ)

- H. G. v. ノスティッツ＝ドルツェ
ヴィーキー
- Nostitz-Drzewiecky, Hans Gottfried von
(ノスティッツ＝ドルツェヴィー
キー) [1863-1958] (Ⅲ) 119; (Ⅳ)
184
- Nostitz und Jänckendorf, Eduard von (ノ
スティッツ・ウント・イエンケンドル
フ) [1791-1858] (Ⅳ) 118, 132
- Nostitz-Wallwitz (ノスティッツ＝ヴァル
ヴィッツ) → H. v. ノスティッツ・
ヴァルヴィッツ
- Nostitz-Wallwitz, Alfred von (A. v. ノス
ティッツ＝ヴァルヴィッツ) [1870-
1953] (Ⅲ) 117; (Ⅳ) 126, 133
- Nostitz-Wallwitz, Gustav von (G. v. ノス
ティッツ＝ヴァルヴィッツ) [1789-
1858] (Ⅱ) 152; (Ⅳ) 117, 122,
133
- Nostitz-Wallwitz, Hermann von (H. v. ノス
ティッツ＝ヴァルヴィッツ) [1826-
1906] (Ⅰ) 214; (Ⅲ) 97, 102-
103, 120; (Ⅳ) 185; (Ⅳ) 122,
133
- Nostitz-Wallwitz, Herren von (ノスティッ
ツ＝ヴァルヴィッツ家) (Ⅲ) 119
- Nostitz-Wallwitz, Karl Neale von (K. N. v.
ノスティッツ＝ヴァルヴィッツ)
[1863-1939] (Ⅲ) 119
- Oberländer, Martin Gotthard (オーバーレ
ンダー) [1801-1868] (Ⅱ) 153-155,
182; (Ⅴ) 145-146; (Ⅳ) 119, 132
- Obermann, Karl (オーバーマン) [1905-
1987] (Ⅴ) 168; (Ⅳ) 118, 120
- Opitz, Alfred (A. オーピッツ) [1910-!] (Ⅳ)
173, 176, 181
- Opitz, Hugo Gottfried (H. G. オーピッツ)
[1846-1916] (Ⅷ) 250, 253
- Oppel, Karl Friedrich Gustav von (オッペ
ル) [1795-1870] (Ⅳ) 182; (Ⅳ)
133
- Osterroth, Franz (オースターロート)
[1900-1986] (Ⅳ) 115, 127, 130
- Otto, Viktor (seit 1907: von) (オットー)
[1852-1912] (Ⅲ) 110, 113-114;
(Ⅴ) 160; (Ⅷ) 253; (Ⅳ) 125,
132
- Pfordten, Ludwig Karl Heinrich (seit
1854: Freiherr) von der (プフォルテ
ン) [1811-1880] (Ⅰ) 214; (Ⅱ)
153, 155-156; (Ⅳ) 162, 182; (Ⅳ)
119, 133
- Philipp, Albrecht (フィーリップ) [1883
-?] (Ⅷ) 246-247; (Ⅳ) 122
- Planitz, Karl Paul von der (プラーニッツ)
[1837-1902] (Ⅲ) 106, 108; (Ⅳ)
124, 133
- Pönicke, Herbert (ペーニッケ) [1904-
1975] (Ⅳ) 121
- Pohl, Hans (ポール) [1935-!] (Ⅰ)
183; (Ⅳ) 167
- Rabenhorst, Bernhard (seit 1856: von)
(ラーベンホルスト) [1801-1873]
(Ⅱ) 155-158, 163, 165; (Ⅲ)
95; (Ⅴ) 147; (Ⅳ) 120, 133
- Reinhardt, Paul (ラインハルト) [1891-?] (Ⅷ)
249; (Ⅳ) 117
- Renn, Ludwig (レン) [1889-1979] Arnold
Friedrich Vieth von Golßenau] (Ⅲ)
108, 121
- Reuning, Theodor (ロイニンク) [1807-
1876] (Ⅱ) 164-165, 169; (Ⅳ) 121
- Reuther, Martin (ロイター) [1901-1975]
(Ⅳ) 178, 182
- Richter, Albert (A. リヒター) [1909-!] (Ⅳ)
173
- Richter, Hubert (H. リヒター) [1882-1948]
(Ⅲ) 120

- Richter, Julius (J. リヒター) [1861-?] (K) 134
- (Ⅲ) 121-122
- Ringel, Martin (リングエル) [1898-1982] (I) 188
- Ritter, Gerhard Albert (リッター) [1929-!] (K) 122
- Rösler, Ingo (レースラー) [1923-] (Ⅷ) 250, 255; (K) 123-125
- Rüdiger, Bernd (リュエディガー) [1942-!] (Ⅷ) 256
- Rüger, Konrad Wilhelm (seit 1907: von) (リュエーガー) [1837-1916] (Ⅲ) 106-107, 110, 113, 115; (V) 160; (K) 124, 132
- Ruhland, Volker (ルーラント) [1949-!] (N) 174; (Ⅷ) 249; (K) 129, 135
- Rumpelt, Anselm (ルンペルト) [1853-1916] (N) 161; (K) 128
- Rumpler, Helmut (ルンプラー) [1935-!] (Ⅱ) 167; (Ⅷ) 254
- Ruß, Ralph (ルース) [1865-1946] (K) 122, 124-125, 128, 134
- Satlow, Marianne (ザトロウ) [1907-!] (N) 173, 176; (K) 115
- Schaarschmidt, Karl Friedrich (シャールシュミット) [1788-1864] (Ⅱ) 149; (N) 182; (K) 116
- Schaller, Karlheinz (シャラー) [1944-!] (Ⅷ) 249
- Schauer, Rolf (シャウアー) [1934-1982] (V) 191
- Schelcher, Walter (シェルヒャー) [1851-1939] (N) 161; (K) 128
- Schieck, Walther (シーク) [1874-1946] (V) 181; (K) 130-131
- Schiel, Harald (シーケル) [1920-!] (N) 181; (K) 135
- Schiffner, Carl (シッフナー) [1865-1945] (K) 134
- Schiller, Klaus Jürgen (シラー) [1935-1986] (V) 192
- Schimmel, Ernst Otto (シメル) [1889-1930] (V) 143, 158-159; (Ⅷ) 253-254, 260-262; (K) 119, 124, 130
- Schlechte, Alexander (A. シュレヒテ) [?] (Ⅷ) 249
- Schlechte, Horst (H. シュレヒテ) [1909-1986] (I) 187; (Ⅱ) 167; (N) 175, 181-183; (V) 138, 148, 168; (Ⅷ) 176, 194-195; (Ⅶ) 250-251; (K) 128, 130, 134-135
- Schlesinger, Walter (シュレージンガー) [1908-1984] (I) 215
- Schlieben, Joachim Kaspar Anton Richard von (シュリーベン) [1848-1908] (Ⅲ) 119, 111-112; (V) 160; (K) 125, 133
- Schmidt (シュミット) → G. シュミット
- Schmidt, Gerhard (G. シュミット) [1920-!] (I) 184-188, 195-199, 215-216; (Ⅱ) 147; (Ⅲ) 95; (N) 159, 167-171, 173, 175, 177-182, 184-189; (V) 138-140, 143, 166; (Ⅷ) 164, 168, 176, 194-195; (Ⅶ) 249-251; (Ⅷ) 249-253, 255; (K) 116-118, 129, 135
- Schmidt, Marianne (M. シュミット) [1928-!] (V) 154
- Schmidt, Siegfried (S. シュミット) [1930-1986] (V) 144, 168
- Schneider, Robert (シュナイダー) [1807-1871] (Ⅱ) 166; (Ⅲ) 101, 119; (K) 122, 132
- Schönburg, Herren von (シェーンブルク家) (I) 196, 199; (Ⅲ) 118; (N) 177; (V) 164, 166; (Ⅷ) 172,

- 175-176, 181; (Ⅷ) 249, 251; (K) 118
- Schöne, Bruno (シェーネ) [1878-?] (Ⅱ) 169; (Ⅷ) 260
- Schreckenbach, Hans-Joachim (シュレックンバッハ) [1928-!] (Ⅵ) 192
- Schröder, Max Otto (M.O. シュレーダー) [1858-1926] (Ⅲ) 117; (K) 126-127, 132
- Schröder, Wilhelm Heinz (W.H. シュレーダー) [1946-!] (K) 127-128, 130, 135
- Schüller, Wiland (シュラー) [1935-1990] (V) 154
- Schulze, Gottlob Leberecht (シュルツェ) [1779-1856] (Ⅱ) 150; (K) 117
- Schurig, Heinrich Rudolf (シューリヒ) [1835-1901] (Ⅲ) 104, 120; (Ⅳ) 184; (K) 124, 132
- Schuster, Oskar (シュスター) [1834-1904] (Ⅲ) 122; (Ⅳ) 178-180; (Ⅷ) 253, 255, 260
- Schwabe, Klaus (シュヴァーベ) [1932-!] (Ⅳ) 181, 183, 185; (K) 132, 134
- Schwarz, Max (シュヴァルツ) [1904-?] (V) 168; (K) 118-119, 121-124, 126-130
- Sebaldt, Otto (ゼーバルト) [1873-?] (Ⅵ) 191-192, 197
- Seydewitz (ザイデヴィッツ) →E.v. ザイデヴィッツ
- Seydewitz, Ernst von (E.v. ザイデヴィッツ) [1852-1929] (Ⅲ) 113, 117; (V) 162; (K) 125, 126, 132
- Seydewitz, Paul von (P.v. ザイデヴィッツ) [1843-1910] (Ⅲ) 106; (K) 124, 133
- Smoler, Jan Arnost (スモラー) [1816-1884] (Ⅱ) 160
- Solta, Jan (ショウタ) [1921-!] (Ⅰ) 200; (Ⅱ) 167-168; (Ⅲ) 119, 121-122
- Spuler, Bertold (シュプラー) [1911-1990] (Ⅱ) 166
- Staude, Fritz (シュタウデ) [1923-!] (V) 154
- Stein, Karl Freiherr von und zum (シュタイン) [1757-1831] (Ⅰ) 186, 205; (Ⅲ) 98; (Ⅵ) 168; (K) 128
- Stock, Ulrich (シュトック) [1896-1974] (Ⅶ) 250
- Stolle, Ferdinand (シュトレ) [1806-1872] (K) 117
- Strauß, Rudolf (シュトラウス) [1904-1987] (V) 155
- Streit (シュトライト) →L.O.W. シュトライト
- Streit, Arnold (A. シュトライト) [1867-1940] (Ⅵ) 196-197
- Streit, Lothar Ottokar Wilhelm (L.O.W. シュトライト) [1823-1898] (V) 155; (K) 130
- Stresemann, Gustav (シュトレゼマン) [1878-1929] (Ⅶ) 248
- Sulkowski, Alexander Joseph Graf von (スーコフスキー) [1695-1762] (Ⅶ) 246
- 田熊文雄 (Takuma, Fumio) [1947-!] (Ⅷ) 251, 255
- Thümmel, Hans von (テュメル) [1824-1895] (Ⅲ) 106; (Ⅳ) 184; (K) 124, 132
- Thümmeler, Gerhard (テュムラー) [1920-!] (V) 154
- Todt, Karl Gotthelf (トット) [1803-1852] (Ⅱ) 158; (K) 120
- Torquemada, Thomas de (トルケマダ)

- [1420-1498] (Ⅲ) 103
 Toskana, L. von (トスカナ) → Luise
 von Toskana (ルイーゼ・フォン・ト
 スカナ)
 Treusch von Buttlar, Karl Friedrich
 August (トロイシュ・フォン・ブ
 トラル) [1790-1856] (Ⅱ) 153,
 156; (Ⅳ) 182; (K) 119, 133
 Tzschirner, Samuel Erdmann (チルナー)
 [1814-1870] (Ⅱ) 156-158; (K)
 120
 Unger, Manfred (ウンガー) [1930-!] (Ⅶ)
 249, 252
 Unruh, Georg-Christoph von (ウンルー)
 [1913-!] (Ⅰ) 183; (Ⅳ) 167
 Venus, Ernst (ヴェーヌス) [1880-?] (Ⅲ)
 120-123; (Ⅳ) 161, 165; (Ⅴ)
 158-159, 163; (Ⅵ) 168, 191-192;
 (K) 128
 Verlohren, Heinrich August (フェルロー
 レン) [1827-1905] (K) 117, 119-
 120, 122, 124, 126, 129, 135
 Vitzthum (フィッツトゥーム) → フィ
 ットゥーム・フォン・エックシュテ
 ット
 Vitzthum von Eckstädt, Christoph Johann
 Friedrich Graf (フィッツトゥーム・
 フォン・エックシュテット) [1863-
 1944] (Ⅰ) 214; (Ⅲ) 112-113,
 117; (Ⅴ) 162-163; (K) 125, 133
 Vollprecht, Hans (フォルプレヒト) [1889-
 1959] (Ⅵ) 192
 Volz, Robert (フォルツ) [1887-1958] (Ⅳ)
 186; (K) 126-127
 Wach (ヴァッハ) → A. ヴァッハ
 Wach, Adolf (A. ヴァッハ) [1843-1926] (Ⅲ)
 110; (Ⅴ) 160; (K) 125
 Wach, Felix (F. ヴァッハ) [1871-?] (Ⅵ)
 167, 196
 Wahle, Georg Heinrich (ヴァーレン) [1854-
 1934] (Ⅷ) 255
 Wanak, Jurij Arnost (ヴァナク) [1817-
 1887] (Ⅱ) 160
 Watzdorf, Karl von (K. v. ヴァッツドルフ)
 [1759-1840] (K) 133
 Watzdorf, Werner von (W. v. ヴァッツドル
 フ) [1836-1904] (Ⅲ) 106-107; (K)
 124, 132
 Weber (ヴェーバー) → K. v. ヴェーバー
 Weber, Karl (seit 1829: von) (K. v. ヴェー
 バー) [1806-1879] (Ⅱ) 153, 155,
 161, 167-168; (Ⅲ) 119-120; (Ⅳ)
 167, 183; (Ⅴ) 148; (Ⅶ) 247;
 (K) 118
 Weber, Rolf (R. ヴェーバー) [1930-!] (Ⅰ)
 215-216; (Ⅱ) 167; (Ⅴ)
 139, 148; (Ⅷ) 253; (K) 115,
 121, 135
 Wecker, Fritz (ヴェッカー) [? - ?] (Ⅲ)
 121
 Wedel, Ernst von (ヴェーデル) [1830-
 1899] (Ⅳ) 178
 Wehler, Hans-Ulrich (ヴェーラー) [1931-
 -!] (K) 121
 Weinlig, Christian Albert (ヴァインリヒ)
 [1812-1873] (Ⅱ) 155-156, 161-
 162, 164-165, 168-169; (Ⅳ) 183;
 (K) 119, 133
 Weiß, Volkmar (ヴァイス) [1944-!] (K)
 129
 Wernicke, Friedrich (ヴェルニッケ)
 [1902-1982] (Ⅳ) 171; (Ⅷ) 255
 Wietersheim, Eduard von (ヴィーター
 スハイム) [1787-1865] (Ⅱ) 152; (Ⅴ)
 144; (K) 117-118, 133
 Wildenfels, Herren von (ヴィルデンフェ
 ルス家) (Ⅴ) 164, 166; (Ⅵ) 195
 Wilhelm I. (ヴィルヘルム一世, プロイセ

- ン国王) [1797-1888 (König von Preußen)] (Ⅲ) 96
- Wilhelm I. (ヴィルヘルム一世, ヴェルテンベルク国王) [1781-1864 (König von Württemberg)] (Ⅱ) 156
- Wilhelm II. (ヴィルヘルム二世, ドイツ皇帝) [1859-1941 (Deutscher Kaiser)] (Ⅲ) 109, 121
- Wilsdorf, Viktor (seit 1911: von) (ヴィルスドルフ) [1857-1920] (Ⅲ) 117; (Ⅳ) 185; (Ⅴ) 126, 133
- Witzleben, Cäsar Dietrich von (ヴィッツレーベン) [1823-1882] (Ⅱ) 167; (Ⅴ) 165; (Ⅷ) 249; (Ⅸ) 117, 129
- Woelker, Konrad (ヴェルカー) [1875-?] (Ⅶ) 250
- Wucher, Albert (ヴーハー) [1921-!] (Ⅸ) 121
- Wuttke, Robert (ヴットケ) [1859-1914] (Ⅸ) 116
- 山井敏章 (Yamai, Toshiaki) [1954-!] (Ⅸ) 115
- Zeigner, Erich (ツァイグナー) [1886-1949] (Ⅲ) 122; (Ⅶ) 248; (Ⅸ) 128
- Zeise, Roland (ツァイゼ) [1923-!] (Ⅰ) 215-216; (Ⅱ) 168; (Ⅳ) 183; (Ⅴ) 140, 168; (Ⅷ) 249-250, 252-254, 256; (Ⅸ) 115, 121
- Zeschau (ツェッシャウ) → H. A. v. ツェッシャウ
- Zeschau, Heinrich Anton von (H. A. v. ツェッシャウ) [1789-1870] (Ⅰ) 214; (Ⅱ) 148-152, 155, 167; (Ⅴ) 166; (Ⅸ) 129, 132-133
- Zeschau, Heinrich Wilhelm von (H. W. v. ツェッシャウ) [1760-1832] (Ⅳ) 178
- Zeischwitz, Johann Adolf von (ツェッチュヴィッツ) [1779-1845] (Ⅱ) 148-149; (Ⅴ) 166; (Ⅸ) 129, 133
- Zschinsky, Ferdinand (seit 1856: von) (チンスキー) [1797-1858] (Ⅱ) 157-158, 162-164, 168; (Ⅴ) 147, 149; (Ⅸ) 120, 132
- Zwahr, Hartmut (ツヴァール) [1936-!] (Ⅰ) 200; (Ⅱ) 167-168; (Ⅲ) 119, 121-122; (Ⅴ) 193; (Ⅷ) 249